

Shirley Jackson の *The Lottery* と『旧約聖書』 「くじ引き」と「生け贄」と「石打の刑」

落 合 和 昭

作者点描：Shirley Jackson と Brainerd Duffield.....	1
第一章 短編小説 <i>The Lottery</i> の「くじ引き」「生け贄」「石打の刑」.....	3
第二章 短編小説 <i>The Lottery</i> と一幕劇 <i>The Lottery</i>	26
第三章 「くじ引き」と「生け贄」と「石打の刑」.....	38
「くじ引き」と『旧約聖書』.....	38
「生け贄」と『旧約聖書』.....	52
「石打の刑」と『旧約聖書』.....	60
結び.....	65

作者点描：Shirley Jackson と Brainerd Duffield

Shirley Jackson(1919-65)の短編小説 *The Lottery* が発表されたのは、第二次世界大戦の終了からほぼ三年近く経った 1948 年、彼女が二十九歳のとき、週刊誌 *The New Yorker* の 6 月 28 日号の誌上であった。この五年後の 1953 年に、俳優であり、脚本家である Brainerd Duffield(1917-79、Brainard と綴られている場合もある)がこの短編小説を一幕劇に書き直している。そのため、*The Lottery* は、半世紀以上にわたって、短編小説として読まれてきただけでなく、劇としても、多くの観客の関心を集めてきた。

Jackson 自身は温暖な California 州の San Francisco で生まれ、その後、San

Francisco から南へ約二十五キロ、車で、約二十分のところにある、San Francisco Bay 沿いの町 Burlingame で少女期を過ごした。やがて、彼女は New York 州の北部、五大湖の一つであるオンタリオ湖やナイアガラ滝にほど近い都市、Rochester に移り住み、Syracuse 大学で英文学を学んだ。彼女はそこで知り合った Stanley Edgar Hyman(1919-1970)と結婚する。後に、Hyman は Bennington College で教鞭をとり、文芸批評家になった。そのため、彼女はカナダと国境を接しているアメリカ北東部 Vermont 州の南、Massachusetts 州との州境にある Bennington に移り住んだ。Hyman は、文芸批評家として、*The Armed Vision: A Study in the Method of Modern Literary Criticism* や *Iago: Some Approaches to the Illusion of His Motivation* 等の著書を著した。

彼女は、夏は短く、冬は長くて、寒い、Bennington の田園地帯の中で暮らしながら、四人の子供を育てた。彼女は、四十六年の短い生涯において、多くの子供や青少年向けの本を書いたが、それは、彼女自身、子供が多かったことと深く関係しているかもしれない。彼女が書いた青少年向けの本には、*The Witchcraft of Salem Village*(1956)、*The Haunting of Hill House*(1959)、*We have Always Lived in the Castle*(1962)、*Magic of Shirley Jackson*(1966)等の小説があるが、その「題名」からも想像できるように、それらはゴシック的色彩の濃い、オカルト的なホラー小説である。Jackson にとっては、*The Lottery* は比較的初期の作品に入るが、この短編小説には、すでに、後の作品に見られる童話的要素、ゴシック的色彩、恐怖小説的特徴が顕著に見られる。

彼女の *The Lottery* を一幕劇に劇化した Brainerd Duffield は 1917 年生まれであるので、Jackson よりも二歳年上である。彼は Massachusetts 州 Boston に生まれ、California 州 Hollywood で亡くなっている。彼は、奇しくも、California で生まれ、東北の Vermont 州で亡くなっている Jackson とは、地理的に、まさに、正反対の場所で生まれ、死んでいることになる。かなりのアメリカ映画通の人でも、Duffield の名前はほとんど聞いたことがないであろう。筆者が調べた幾つかのアメリカ映画産業に携わる人物を取り扱った辞典⁽¹⁾の類にも載っていないかった。

彼は、脚本家としては、最初は、上演時間が十一分の短編映画 *Madero of Mexico*(1942)や、やはり、上演時間が十五分と短い映画 *Phantoms, Inc.*(1945)等を書いた。その後、映画 *The Treasure of Lost Canyon*(1952)や CBS テレビのテレビシリーズの *Front Row Center*(1955)のいくつかのエピソード等を書いている。また、俳優としては、Orson Welles が監督した *Macbeth*(1948) や *Jigsaw*(1949)等に出演している。さらに、彼は、脚本家としての才能を生かして、Jackson の *The Summer People*、O. Henry(1862-1910) の *Gift of Magi*、J. R. R. Tolkien(1892-1973)の *The Hobbit*、Stephen Vincent Benet(1898-1943)の *By the Waters of Babylon*、Lewis Carroll(1932-98)の *Alice in Wonderland* を劇化している。彼は、どちらかと言うと、子供や若い観客向けに作品を劇化していることがわかる。

第一章 短編小説 *The Lottery* の「くじ引き」と「生け贄」と「石打の刑」

この *The Lottery* の「時間」は六月二十七日の午前十時から正午頃まで、「場所」は村の広場である。六月二十七日は Jackson がこの短編小説を *The New Yorker* に載せた六月二十八日号の前日に当たる。これは、偶然の結果、そうなったかもしれないが、彼女が意図的にこの短編小説の「時間」をその発表前日に設定したとも考えられる。いずれにしても、*The New Yorker* の読者は、短編小説の「時間」が 1948 年の六月二十八日号の前日に当たる六月二十七日に設定されているので、特に、読み終わったあとは、この六月二十七日は過去の六月二十七日ではなく、この年の六月二十七日であるかのように感じられたかもしれない。それほど、この作品には、現代性が感じられる。そのため、これは短編小説であるが、同時に、どこか、最近起こった出来事の特集した雑誌の特集記事のような感じも与える。ある地方で行われている行事に関する特集記事を読んでいるような気になる。

この短編小説の冒頭は、

The morning of June 27th was clear and sunny, with the fresh warmth of a full-summer day; the flowers were blossoming profusely and the grass was richly green.(p636)

という描写で始まっている。ここには、この六月二十七日が、今年か、それとも、過去か、いつの六月二十七日であるかについては、書かれていない。六月二十七日はアメリカの独立記念日である七月四日のほぼ一週間前であり、アメリカの愛国心がしだいに高揚しつつある時期である。このことも考慮して、Jacksonはこの短編小説の「時間」を六月二十七日に設定したのであるうか。

この六月二十七日の朝はきれいに晴れわたり、太陽が燦々と輝いている。空気が盛夏の新鮮な暖かさに満ち、花は豊かに咲き乱れ、草も青々と繁っている。この描写からは自然の恵みや豊かさが伝わってくる。この描写からは、不気味さや死の予兆は微塵も感じられない。それは、まるで、童話のような書き出しであり、読者には、これから先、幸福な場面が展開していくのではないかと感じさせるのに十分である。この豊かで、美しい自然に囲まれた、一見すると、ほとんど眠っているように見える、平和そうな村にある、郵便局と銀行の間の広場に村人たちが集まってくる。この広場で、何十年にもわたって、いや、もう一世紀以上にわたってかもしれないが、毎年、この六月二十七日になると、村人全員が参加する「くじ引き」が行われてきた。そして、その「くじ引き」によって選ばれた一人が、「くじ引き」の直後、その広場で、村人全員による「石打の刑」で殺されてきた。この村では、「くじ引き」による、この殺人の儀式が、毎年、公然と行われてきたのである。毎年、一人が「くじ引き」で選ばれ、「石打の刑」によって殺されているので、「くじ引き」が行われてきた年の数だけ、人が殺されてきたことになり、当然のことながら、この「くじ引き」が百年以上続いていたとすると、もうすでに、百人以上が殺されてきた計算になる。恐ろしい数字である。

作者の Jackson は不気味さや死の恐怖を内包している、この短編小説の殺人の「場所」として、きれいに晴れ上がり、太陽が燦々と輝き、花が咲き乱れ、

草も青々としている自然に囲まれた村の広場、すなわち、通常は、村人たちにとって、最高の憩いの場所であるはずの広場を設定している。しばしば、ゴシック的な不気味さや死の恐怖の舞台は、夜や闇の中、しかも、人里から離れた場所で起こることが多い。しかし、Jackson はこの短編小説の舞台を、日中、明るい光に包まれた豊かな自然の中にある村、しかも、村の中心地にあり、村人たちにとっては、憩いの場所である広場に設定し、そこで行われる不気味な死の儀式を描いている。明るい光の中で、黒い恐怖が描かれ、豊かな自然の中で、人間の恐るべき残忍な行為が描かれる。作者は、「くじ引き」と「石打の刑」がもたらす恐怖や死を描くにあたって、「背景」と「筋」を一致させようとせず、意図的に、明るい光の中の恐怖・死という設定をしている。「背景」と「筋」が極端なコントラストをなしている。ゴシック的な死の恐怖が、中世的な暗い状況の中ではなく、現代的で、明るい光の中で、描かれている。

毎年、六月二十七日の十時から、「くじ引き」が行われることを知っている村人たちは、この日も、朝の十時頃になると、三々五々、村の広場に集まってくる。この小さな村の人口は、現在、三百人ほどであるので、「くじ引き」と「石打の刑」は約二時間ほどで終わる予定である。この行事が終わったあとは、家に帰って、昼食がとれるようにという配慮があって、「くじ引き」が始まる時間が朝の十時に設定されている。Jackson はそのことを、さりげなく、

...so it(the lottery) could begin at ten o'clock in the morning and still be through in time to allow the villagers to get home for noon dinner. (p637)

(下線及び括弧内は筆者、点線部分は省略部分)

と書いている。村人たちは、毎年、この日には、「くじ引き」をしたあと、「石打の刑」で人を殺してきた。その後、家へ帰り、何事もなかったように、昼食を食べることが習慣になっている。普通の人の観点から見れば、通常、「石打の刑」で人を殺してきた後は、処刑された人の姿や顔が心に強く残り、ひどく気が動転するか、とても食事を取る気分にはならないと思われるが、この村人た

ちはそうではないらしい。このことは、「くじ引き」と「石打の刑」という殺人ための行事が、この村では、ごく当たり前の行事、あらためて取り上げて話題にすることもないような、ごくありふれた行事として行われていることを示している。だからこそ、「石打の刑」のすぐ後に、何事もなかったように、食事がとれるのである。本来なら、「石打の刑」という殺人という行為と、その殺人の後、何事もなかったように、平然と昼食を食べる村人たちの行為の間には、大きなギャップがあるように感じられる。しかし、Jackson は、あえて、その大きなギャップについて深入りをして細かく描くことをせずに、村人にとっては、まるで殺人と毎日食べる食事が同次元の出来事であるかのように、淡々と描いている。このような描写の仕方は、細かいところにいたるまで微に入り細に入り、リアルに描く描写方法とは異なっているが、かえって、ごく平凡な日常生活を送っている村人たちの心の中に潜む残酷な殺意を、一瞬のうちに、あぶり出しているのではないだろうか。

Jackson は、この「くじ引き」について、

... in some towns there were so many people that the lottery took two days and had to be started on June 26th,...(p637)

(下線は筆者、点線部分は省略部分)

と書いている。この村とは違って、いくつかの町では、人口が多いので、全員参加の「くじ引き」をするのに時間がかかってしまうため、通常は、一日のところ、二日間にわたって、「くじ引き」が行われている。このことは、この「くじ引き」とそれに続く「石打の刑」が、この村の中だけで行われている、村独自の伝統行事ではなく、この地方一帯の町や村でも、一般的に行われていて、地理的にも、かなりの広がりを持った伝統行事であることを示している。「くじ引き」による「石打の刑」という殺人の儀式はごく一部の人々だけに限られた伝統行事ではなく、かなり多くの人々が、長い間にわたって、行ってきた伝統的な儀式であるため、そのかなりの部分が人間性に根ざした儀式であるように

も感じられる。また、人口の多い町では、一日で、「くじ引き」と「石打の刑」が終わらないので、この村のように、六月二十七日に「くじ引き」を始めるのではなく、前日の二十六日に「くじ引き」を始めている。このことは、人口が多い場合は、「くじ引き」の日は六月二十六日と二十七日の二日間にわたってもよいが、「石打の刑」が行われる日は、どの町村においても、六月二十七日に定められていることになる。「石打の刑」の日、すなわち、処刑の日だけは動かすことができず、この日は、この地方一帯にとって、特別な日ということになる。

この「くじ引き」が行われる日は、毎年、六月二十七日に設定されているので、年ごとに、曜日は異なることになる。この「くじ引き」は、おそらく、百年以上にわたって続いていると思われるので、この「くじ引き」の日は、可能性として、もうすでに、日曜日から土曜日までのすべての曜日が当たっていると思われる。「くじ引き」は、毎年、朝の十時に始まり昼ごろ終わるので、もしその日が日曜日にあった場合、教会の礼拝も日曜日の午前中に行われるのが通例であるので、この村では、教会の礼拝と「くじ引き」の時間が重なった場合は、どちらが優先されているのだろうか。Jackson はこの点については何も書いていないだけでなく、教会自体についても、何も触れていない。アメリカにおいては、この村のような伝統的な村では、必ず、村の中心部には、教会があるはずであるが、彼女はキリスト教会と「くじ引き」・「石打の刑」という儀式の関係については何も書いていない。そのため、キリスト教の教会儀式からこの「くじ引き」・「石打の刑」という儀式が生まれたのか、それとも、他の異教の儀式に基づいた儀式であるのか、この殺人儀式の出处はわからない。

この六月二十七日には、学校はすでに夏休みに入っているので、最初に、この広場に集まってくるのは子供たちである。下の引用文にもあるように、子供たちは「石」を集めて遊んでいるように見える。Jackson は、子供たちが「石」を集めて、それで遊んでいる様子について、

Bobby Martin had already stuffed his pockets full of stones, and the other boys soon followed his example, selecting smoothest and roundest stones; Bobby and

Harry Jones and Dickie Delacroix the villagers pronounced this name Dellacroy eventually made a great pile of stones in one corner of the square and guarded it against the raids of the other boys.(p637)

(下線は筆者)

と描写している。子供たちは、「くじ引き」が行われる広場の片隅に、拾い集めてきた「石」で、「石」の大きな山を築いている。この短編小説の終わりに、村人たちが「くじ引き」で選ばれた一人の女性を「石打の刑」に処するとき、子供たちが集めてきた、これらの「石」が用いられている。子供たちが集めた「石」が後の「石打の刑」の“foreshadowing”、すなわち、「伏線」になっている。

「くじ引き」と「石打の刑」は、毎年、行われているので、子供たちが集めた「石」が「石打の刑」で使われるということは、子供たちもそれらの「石」が「石打の刑」で使われるということを知っていて、集めていたことになる。このことを知らずに、ただ無邪気に、「石」を集めるだけなら、子供たちは「石打の刑」に間接的に関わっていることになる。しかし、じっさい、子供たちは「石」と「石打の刑」の関係を知っていて、「石」を集めていたことになる。彼ら自身も「くじ引き」に直接参加し、「石打の刑」で「石」を投げたのである。ということは、子供たち自身も「くじ引き」で選ばれ、「石打の刑」で殺される可能性があるということになる。この短編小説では、書かれていないが、この儀式の中で、今までには、子供たちも、「くじ引き」で選ばれ、「石打の刑」で殺されてきた可能性がある。この作品では、Mrs. Hutchinson という女性が「石打の刑」で殺されているので、女性もこの儀式には参加してきたことは明らかである。子供たちの場合は、厳密に言えば、子供たちが「くじ引き」に参加しているところは描かれているが、「石打の刑」に参加し、自らも、「石」を投げつけるところは描かれていない(短編小説では、子供たちが「石打の刑」に参加するようと、「石」を手にするところまでは描かれているが、彼らが、じっさいに、「石」を投げつけるところまでは描かれていない)。子供が興じていた「石」

が、のちに、「石打の刑」という殺人の凶器として用いられ、子供たちも、自ら、「くじ引き」や「石打の刑」に参加して、「石」を投げるということは、「くじ引き」「石打の刑」という殺人の儀式が、大人だけではなく、子供たちをも巻き込んでいることを示している。この村では、いや、この地方一帯では、子供たちにも殺人の儀式に、直接、参加させているのである。子供であっても、殺人の儀式に参加させているということは、この村では、「くじ引き」による「石打の刑」を人殺しとは位置づけていないような印象を与える。それでは、幼い子供までも参加させる「くじ引き」から「石打の刑」にいたる、この儀式は、いったい、何の儀式なのだろう。少なくとも、村人たちはこの儀式を単なる殺人であるとは考えていないように思われる。だからこそ、「くじ引き」・「石打の刑」という儀式が終わったあと、平然と、何事もなかったかのように、昼食が食べられるのである。もし村人たちに「くじ引き」「石打の刑」という儀式が、儀式の形をとっていても、これは、紛れもなく、殺人であることには変わりはないという自覚があったのなら、当然のことながら、この儀式に子供たちを参加させることはなかったであろう。それでは、村人たちにとって、この儀式はどんな意味を持っているのであろうか。

「石」で遊んでいる子供たちに続いて、男たちが作物の植え付け、雨、トラクター、税金のことなどについて話しながら、集まってくる。男たちに関する描写の中から、この村の主なる産業が農業であることがわかる。やがて、農業も「くじ引き」の「伏線」になっていることがわかってくる。続いて、女たちも集まってきて、夫の傍らへ行く。さらに、子供たちは両親から呼ばれ、それぞれの親のところへ行く。ここでは、村人たちは夫たち、妻たち、子供たちという形で集まるのではなく、夫、妻、子供たちが一緒になる形、すなわち、家族単位で集まっている。この家族単位で集まることも、この「くじ引き」の方法に関する「伏線」となっている。この二つの「伏線」については、のちに、詳しく触れることにする。

「くじ引き」について、Jackson は、

The lottery was conducted as were the square dance, teenage club, the Halloween program by Mr. Summers who had time and energy to devote to civic activities. He was a round-faced, jovial man and he ran the coal business, and people were sorry for him, because he had no children and his wife was a scold. (p637)

(下線は筆者)

と書いている。すなわち、「くじ引き」はスクエアー・ダンス、ティーンエイジ・クラブ、ハローウィーンの催し物のように行われている。ということは、「くじ引き」に続く「石打の刑」も、同じように、年中行事のように行われていることになる。この「くじ引き」は、毎年、繰り返して行われているので、村人たちにとっては、それは年中行事予定に組み込まれていて、すでに十分慣れ親しんでいる行事であり、何か特別な行事ではないことを意味している。それは、言うまでもなく、「くじ引き」だけではなく、「石打の刑」がもたらすことになる殺人にも慣れ親しんでいることになる。この村では、「石打の刑」による殺人もスクエアー・ダンス、ティーンエイジ・クラブ、ハローウィーンの催し物と同次元のものであり、それ以上でも、それ以下でもない。彼らにとって、それが毎日食べる食事と同次元のものであったように。

この「くじ引き」の進行役は、長年にわたって、村の様々な活動に献身的に携わってきた Mr. Summers である。毎年、夏になると、積極的に、この「くじ引き」に携わってきた人物の名前が「夏」を意味する Summers であることも、象徴的であり、作者 Jackson の意図が感じられる。彼は丸顔で、陽気な男で、子供がなく、口うるさい妻がいる、ごく平凡な男であり、「くじ引き」と「石打の刑」という殺人の儀式とはまったく関係がないような男である。それゆえに、かえって、平凡な人間の中に潜む残酷な殺意が強烈に滲み出ている。それを象徴するかのように、彼の商売が'coal-black'、'真っ黒な'闇を連想させる "coal business" 「石炭業」を営んでいる。また、Summers が「くじ引き」の準備をしているとき、郵便局長が手伝っているが、その郵便局長について、Jackson は、

The postmaster, Mr. Graves, followed him, carrying a three-legged stool, and the stool was put in the center of the square and Mr. Summers set the black box down on it.(p637)

(下線は筆者)

と書いている。「くじ引き」用であり、死の象徴である「黒い箱」を持ち、Mr. Summers の後について、広場に登場してくる郵便局長の名前が“ Graves ”、「墓」になっていることも「石打の刑」による死を連想させるのに十分である。このように、「くじ引き」の進行役の名前が、イギリス中世の道徳劇 *Everyman* や John Bunyan(1628-88)の *The Pilgrim's Progress*(1678)の「登場人物」の名前のように、寓意的な名前、Summers、「夏」と Graves、「墓」になっていることも、この短編小説に、童話的雰囲気とともに、宗教的な要素を持ち込んでいるように感じられる。

「くじ引き」と Mr. Summers と Mr. Graves の二人の関係については、

The night before the lottery, Mr. Summers and Mr. Graves made up the slips of the paper and put them in the box, and it was then taken to the safe of Mr. Summers' coal company and locked up until Mr. Summers was ready to take it to the square next morning. The rest of the year, the box was put away, sometimes one place, another year underfoot in the post office, and sometimes it was set on a shelf in the Martin grocery and left there.(p638)

と書かれている。「くじ引き」の前の晩になると、Mr. Summers と Mr. Graves の二人が「くじ引き」の用紙を作り、「黒い箱」に入れ、次の朝、広場へ持っていくことになっている。当日まで、それを Mr. Summers の石炭会社の金庫に保管しておくことになっている。この二人が「くじ引き」を行う中心人物であることは明らかであろう。そのため、毎年、夏(summer)になると、墓(grave)が作られるのである。Mr. Summers は、おそらく、村の職員であろう。もし村の職員

であるとする、この「くじ引き」は私的な行事ではなく、公的な行事であるということになる。ということは、「くじ引き」に続く「石打の刑」も公的な行事であるということになる。それは殺人が公的な行事の中に組み込まれていることを意味する。さらに、この「くじ引き」・「石打の刑」の儀式が、この村の中だけではなく、この地方一帯で行われていることを考えると、この儀式と社会体制の関係が浮かび上がってくる。すなわち、Jackson は、現代においても、社会体制の中に、この「くじ引き」・「石打の刑」の儀式が存在し、それが、毎年のように、行われていると思っているのでないか。もちろん、この作品のように、じっさいに、「くじ引き」・「石打の刑」の儀式が行われているという意味ではなく、この「くじ引き」・「石打の刑」の儀式の変形版、類似した形が横行していると考えているのではないだろうか。社会体制の中に、「くじ引き」・「石打の刑」の儀式と類似した儀式が存在し、日々、人々が、正義という名の下に、その儀式の犠牲になり続けているのではないか。その儀式からは、この短編小説のように、男も、女も、子供さえも逃れることができない。いつ何時、誰がこの犠牲者になるのかわからない。その犠牲者は、まさに、「くじ引き」で選ばれたときのように、選ばれるのである。

「くじ引き」が始まるときの様子について、Jackson は

When he (Mr. Summers) arrived in the square, carrying the black wooden box....(p637)

(括弧内は筆者、点線部分は省略部分)

と書いている。「くじ引き」を始めるにあたって、指導的な役割を担っている Mr. Summers が「黒い箱」を持って広場に出てくる。Jackson は、「くじ引き」の箱の色を黒にすることによって、この「くじ引き」の結果をもたらすことになる死の「伏線」を作っていると考えていいだろう。さらに、彼女は、この「黒い箱」について、

The original paraphernalia for the lottery had been lost long ago, and the black box now resting on the stool had been put into use even before Old Man Warner, the oldest man in town, was born.(p638)

と書いている。以前、この「くじ引き」のときに使用されていた、本来の付属品はとうの昔に失われ、今では、その代わりに、「黒い箱」が使われるようになった。しかし、その「黒い箱」自体も、この村の最年長である Old Man Warner が生まれる前から使用されているので、この「黒い箱」が使われるようになって以来、少なくとも、四分の三世紀ほどの時間が流れている。そのため、以前には、「黒い箱」の代わりに、何が使われていたのか、今となっては、まったくわからない。ということは、死を象徴する「黒い箱」が使われる以前は、別のものが使われていた可能性があり、以前は、この「くじ引き」は死をもたらす儀式でなかったとも考えられる。それが、「黒い箱」に取って代わられた頃から、この「くじ引き」の持つ意味が変わり、いつしか、死をもたらす儀式に変わった可能性もある。このことは、この「くじ引き」が持っていた、本来の意図が失われ、知らず知らずのうちに、死の儀式に変わっていったことを暗示している。

さらに、この「黒い箱」についての言及は続く。

Mr. Summers spoke frequently to the villagers about a new box, but no one liked to upset even as much tradition as was represented by the black box. There was a story that the present box has been made with some pieces of the box had preceded it, the one that had been constructed when the first people settled down to make a village here.(p638)

Mr. Summers は、しばしば、「黒い箱」があまりにも古くなったので、新しい箱を作ることを村人に提案したが、彼らは「黒い箱」が持つ長い伝統を壊したくないので、誰一人として、彼の話には乗り気ではなかった。そのため、この「黒

い箱」は換えられることなく、そのまま、何十年も使われているので、その黒い色もところどころ剥げ落ちて、もとの木の肌が見えたり、色あせたりしている。この「黒い箱」は、最初の入植者がこの地に移住してきて、新しい村をつくる時に、作られた箱を利用して作られたという話が伝わっているほど、その歴史は古い。村は、長い歴史の中で、「くじ引き」のやり方をじょじょに変えてきたが、その一方で、この「黒い箱」を用いるようになってからは、村人たちがこの「黒い箱」に頑迷に固執し、それを新しい箱に換えようとしめない姿勢が感じられる。ここには、一度、伝統として確立してしまうと、時代とともに、それがしだいにふさわしくないものになってきても、なかなか変えることができない様子がかがえる。

この「くじ引き」が、本来のやり方や目的とは異なった形で、行われてきているが、そのことについて、Jackson は、この短い短編小説の中で、かなり詳細に描写している。彼女は、まず、この「くじ引き」の儀式全体について、

Because so much of the ritual had been forgotten or discarded,...(p638)

(点線部分は省略部分)

と書いている。すなわち、本来の「くじ引き」の儀式の大部分は忘れ去られ、無視されてきてしまった。このことは、現在では、「くじ引き」が当初の意図とは全く異なる形で行われていることを暗示している。しかし、Jackson は、本来、「くじ引き」は何のために始められたかについては何も書いていないので、読者は、この村では、「くじ引き」がどんな意図を持って始められたのかを知る術がない。しかし、彼女は、儀式の中で、時代とともに、変わってきた部分について、三カ所にわたって取り上げて、具体的に書いている。

彼女は、最初に、この「くじ引き」の儀式の中で行われる「朗唱」の部分について、

...at one time, some people remembered, there had been a recital of some sort, performed by the official of the lottery, a perfunctory, tuneless chant that had been rattled off duly each year;...(p638)

(下線は筆者、点線部分は省略部分)

と書いている。この儀式の中で、最初は、ある種の「朗唱」が唱えられていたが、それがあまりにもおざなりで、メロディーもないので、退屈な部分と思われるようになったのか、しだいに、唱えられなくなってきた。この部分では、“recital”と“chant”という「朗唱」を意味する語が使われているので、この「くじ引き」は、本来は、宗教儀式の一つであったような印象を与える。続けて、

some people believed that the official of the lottery used to stand just so when he said or sang it, others believed that he was supposed to walk among the people, but years and years ago this part of the ritual had been allowed to lapse.(p638)

(下線は筆者)

と書かれているように、「くじ引き」係の役人が話したり、歌ったりするときは、その役人は、ただ、そこに立っていたと思っている者もいれば、そのときは、村人たちの間を歩き回ることになっていたと思っている者もいるという具合に、人によって、言うことが異なるほど、もはや、あいまいな記憶しか残っていない。しかし、「くじ引き」係の役人が話したり、歌ったりする、「儀式のこの部分」も、もう何年も前に、廃れて、行われなくなった。

さらに、

There had been, also, a ritual salute, which the official of the lottery had had to use in addressing each person who came up to draw from the box, but this also had changed with time, until now it was felt necessary only for the official to speak to

each person approaching. (p638)

(下線は筆者)

と書かれているように、以前は、「くじ引き」の役人が「くじ」を引きに来た一人一人に正式に語りかけるという“ ritual salute ”、「儀式的挨拶」をしていたが、今では、役人が一人一人に単に話しかけるだけになり、簡素化されている。この「儀式的挨拶」も時代とともに変わっていった。Jackson は、ここでも、この「くじ引き」が、本来、宗教的儀式であったことを暗示している。

Jackson が取り上げている、この三つの部分は、いずれも、本来、儀式において、行われていた部分が、今では、無視され、廃れてしまった部分である。ということは、本来の儀式が、長い年月の間に、かなり簡略化され、世俗化されたことを意味している。このように、作者はこの「くじ引き」と「石打の刑」が、以前は、宗教儀式と何か関係があったかのような書き方をしている。この「くじ引き」と「石打の刑」が宗教儀式であったとすると、それはキリスト教の儀式であると思われるが、彼女は、キリスト教とこの儀式の関係については、何も書いていない。とは言え、“ so much of the ritual had been forgotten or discarded ”、「儀式のかなり多くの部分は忘れられたり、無視されたりしてしまった」とあるように、その儀式がキリスト教の儀式であったとしても、現在では、その儀式は本来のキリスト教の儀式とはほど遠いものになってしまっていることは確かであろう。

この三つの部分はすべて簡素化され、世俗化した部分であるが、新しくされた部分については、Jackson は一つだけ例を挙げている。それは「くじ引き」の「くじ」についてである。そのことについては、

Mr. Summers had been successful in having slips of paper substituted for the chips of wood that had been used for generations. Chips of wood, Mr. Summers had argued, had been all very well when the village is tiny, but now that the population was more than three hundred and likely to keep growing, it was necessary to use

something that would fit more easily into the black box. (p638)

と書かれている。以前は、「くじ」は木片を使っていたが、今は、紙に換えられている。村の人口が少なかったころは、「くじ」に木片を使っていたが、人口が増えてくるにつれて、木片では、「黒い箱」に入りきれなくなってきたので、その箱に収まるようにと、紙に切り替えたのである。

やがて、「くじ引き」が始まるが、

A sudden hush fell on the crowd as Mr. Summers cleared his throat and looked at the list. (p640)

(下線は筆者)

と書かれているように、進行係の Mr. Summers が咳払いをし、リストに目をやると、突然、沈黙が訪れる。彼の咳払いから、この短編小説の雰囲気が一変する。そして、彼は「くじ引き」の進め方について説明をする。その部分は

“ Now, I'll read the names heads of families first and the men come up and take a paper out of the box. Keep the paper folded in your hand without looking at until everyone has had a turn. Everything clear? ” (p640)

となっている。まず、彼が、アルファベット順に、家族の長の名前を読みあげると、呼ばれた人は前に進み出て、「黒い箱」から「くじ」を引く、「くじ」を引いた人は全員が「くじ」を引き終わるまで、「くじ」を開けないで、そのまま手に持ち、全員が「くじ」を引き終わるまで待つ。やがて、全員が引き終わった時点で、いっせいに、その「くじ」を開けるという形を取っている。「くじ引き」が始まると、アルファベット順に、家族の長の名前が読みあげられることになっているので、最初に呼ばれた者は、Mrs. Adams である。この名前は『旧約聖書』「創世記」に出てくる最初の人間であり、最初の罪人(つみびと)である

Adam と Eva の Adam を連想させる。

Jackson は、この「くじ引き」の進行中に、Mr. Adams と Old Man Warner の会話のやり取りを挿入している。それは、この村を含む、この地方で、何故「くじ引き」による「石打の刑」が行われるようになったかを知るための手がかりを与えてくれる。Mr. Adams は村の長老である Old Man Warner に

“ They do say, ” ..., “ that over in the north village they're talking of giving up the lottery. ” (p640)

(点線部分は省略部分)

と言う。すなわち、北の方の村では、この「くじ引き」の廃止を考えているという話をする。それに対して、Old Man Warner は苛立ちながら、

Old Man Warner snorted. “ Pack of crazy, ” ... “ Listening to the young folks, nothing's good enough for them. Next thing you know, they'll be wanting to go back to living in caves, nobody work any more, live that way for a while. Used to be a saying about 'Lottery in June, corn be heavy soon.' First thing you know, we'd all be eating stewed chickweed and acorns. There's always been lottery, ” he added petulantly.“ Bad enough to see young Joe Summers up there joking with everybody. ”

(下線は筆者、点線部分は省略部分)

と言っている。

彼は若い人たちの意見が取り入れられて、「くじ引き」が廃止されることに反対している。彼は、今、「くじ引き」を止めると、洞穴生活へ逆戻りし、誰も働かなくなり、やがて、シチューにしたハコベやドングリを食べて暮らす羽目になると思っている。また、この「くじ引き」は厳かに進められなければならないにもかかわらず、進行係の Summers が冗談交じりに進めていることをおもしろく思っていない。そして、彼は、この地方に伝わっていると思われる諺、「六

月にくじ引きをすると、すぐにトウモロコシが豊作になる」を引き合いに出している。Old Man Warner はこの「くじ引き」と「石打の刑」がトウモロコシの豊作と何か関係があるような言い方をしている。ということは、トウモロコシの豊作を祈願するための一環として、「くじ引き」を行い、村人の中から一人を選び出し、その人を「石打の刑」に処して、豊作のための「生け贄」にすると、この図式が浮かび上がってくる。Mrs. Hutchinson は罪を犯したから「石打の刑」で殺されたのではなく、最初から、毎年、六月二十七日に、「くじ引き」で選ばれた一人を「石打の刑」で殺すことになっているので、殺されたのである。そのため、この「くじ引き」や「石打の刑」は罪を犯すものを罰するためのものではなく、「生け贄」の儀式なのである。しかし、この「生け贄」の儀式には、若い人たちが反対意見を主張するようになってきたため、この儀式の存続が危ぶまれるような状況が生まれつつある。

この Old Man Warner の言葉のすぐあとに、Mr. Adams の妻は

“ Some places have already quit lotteries, ” ... (p641)

(点線部分は省略部分)

と言っている。彼女によれば、いくつかの村や町では、もうすでに、この「くじ引き」を止めてしまっている。このことは、この地方一帯では、この「くじ引き」を続けている町村とそれをすでに止めてしまった町村が混在していることを示していて、「くじ引き」を廃止する機運がこの村の中だけではなく、この地方全体に広がりつつあることを示している。「くじ引き」を存続させようとしている Old Man Warner に「くじ引き」を廃止する動きについて知らせる人物が Adams 夫妻であることは興味深い。

やがて、彼ら全員が「くじ」を引き終わり、彼らが、いっせいに、「くじ」を開いた結果、Hutchinson 家の主人、Bill が黒い「くじ」を引き当てる。その後は、Hutchinson 家の家族分の「くじ」、夫 Bill、妻 Tessie、彼らの三人の子供、Bill, Jr.、Nancy、Davy 分の「くじ」五枚が作られ、その五枚の「くじ」を、順

番に、Hutchinson 家の五人全員が引くことになる(この「くじ引き」の順番、すなわち、最初に家長が「くじ」を引き、次に、その家族全員が「くじ」を引くやり方は、『旧約聖書』「ヨシュア記」に書かれている「くじ」のやり方に似ているが、このことについては、後に触れることにする)。家族五人全員が「くじ」を引くということは、「くじ」を引くのは大人だけではなく、子供も引かなければならない。ということは、子供も「くじ」に当たれば、「石打の刑」に処せられるのである、たとえ、どんなに小さな子供であろうと。

Jackson は、家族五人が「くじ」を引く順番として、最初に、子供の中で一番小さい Davy が引き、次に、姉の Nancy、次に、兄の Bill, Jr. というように、小さい Davy から始めて、一番上の Bill, Jr. に至る形をとっている。子供が「くじ」を引き終わると、次に、妻の Tessie、そして、最後に、夫の Bill が「くじ」を引く。Jackson はこの家族五人が「くじ」を引くときの反応を、一人ずつ、短く、簡潔に描いている。小さい Davy が「くじ」を引くときに、Mr. Summers が「墓」を意味する Mr. Graves に手伝わせているところを見ると、Mr. Graves は、やはり、死へ誘う人物であると考えていいだろう。Jackson は、Davy が「くじ」を引くときの様子について、

... Harry, you help little Dave.”Mr. Graves took the hand of the little boy, who came with him up to the box. “Take a paper out of the box, Davy.” Mr. Summers said. Davy put his hand into the box and laughed. “Take just one paper.” Mr. Summers said. “Harry, you hold it for him.” Mr. Graves took the child's hand and removed the folded paper from the tight fist and hold it while little Dave stood next to him and looked up at him wonderingly.(p642)

(下線は筆者、点線部分は省略部分)

と書いている。この中に、「Davy は箱に手を入れて、笑った」とある。また、「くじ」を一枚以上引こうとしたのか、「一枚だけ引きなさい」と Mr. Summers に言われている。この「くじ引き」が彼に死をもたらす可能性があるにもかかわらず

わらず、彼はそのことがわからず、無邪気な反応を示している。次に「くじ」を引く Nancy については、Jackson は

Nancy was twelve, and her school friends breathed heavily as she went forward, switching her skirt, and took a slip daintily from the box.(p642)

(下線は筆者)

というように、十二歳の Nancy がスカートをゆすりながら進み出て、「優雅に」「くじ」を引く様子を書いている。彼女は人目を気にし始めた年頃の少女であるが、まだ、「くじ引き」の意味がはっきりとわかっていない様子が見てとれる。次に「くじ」を引く Bill, Jr.については、

Billy, his face red and his feet over-large, nearly knocked the box over as he got a paper out.(p642)

(下線は筆者)

Bill, Jr.は「顔を赤くして」、「くじ」を引くとき、「もう少しで、箱を倒しそうになる」ほど、緊張し、かつ、動揺している。この三人の子供の中では、彼が最も感情的に高まり、気が動転している様子が見て取れる。これは、おそらく、彼が「くじ引き」の持つ意味を理解していることからくる反応を示していると思われる。

続いて「くじ」を引く妻の Tessie については

She hesitated for a minute, looking around defiantly, and then set her lips and went up to the box. She snatched a paper out and held it behind her.(p642)

(下線は筆者)

と書いている。「彼女は少し躊躇し、反抗的に周りを見回し、唇を結んで、紙を

さっと取り出している。』ここには、彼女の「くじ引き」に対する反抗の気持ちや怒りが色濃く表れている。しかし、彼女は意を決して、「くじ」を引く。最後の Hutchinson については、

Bill Hutchinson reached into the box and felt around, bringing his hand out at last with the slip of the paper in it.(p643)

と書かれている。「くじ引き」に対する彼の反応がごく自然で、彼が「くじ引き」という儀式を受け入れている様子うかがえる。Jackson は家族五人の「くじ引き」に対する反応が異なっている様子を描いている。

家族五人全員が「くじ」を引き終わり、いよいよ、「くじ」を開けることになり、最初に、Davy に代わって、彼の「くじ」を Mr. Graves が開けるが、Jackson はそのときの様子を

Mr. Graves opened the slip of the paper and there was a general sigh through the crowd as he held it up and everyone could see that it was blank.(p643)

と書いている。Mr. Graves が「くじ」を開き、それを高く掲げると、その紙が印がつけられていない白紙であることがわかったと、集まっている村人の間から、ため息が漏れる。Davy が「くじ」に外れたからである。村人たちは小さな子供を「石打の刑」にすることから逃れられたのである。彼でさえ、「くじ」に当たれば、彼は、その場で、「石打の刑」に処せられるのである。幼い子供であっても、「くじ」に当たれば、「石打の刑」から容赦されることはないのである。続いて、Nancy と Bill, Jr.については、

Nancy and Bill, Jr., opened theirs at the same time, and both beamed and laughed, turning around to the crowd and holding their slips above their heads.(p643)

(下線は筆者)

と書かれている。彼らは「くじ」に外れたので、「二人とも晴れやかに微笑んで、笑う」。彼らは、その後、村人の方を見て、その印のついていない白紙を高く掲げる。彼らが「くじ」に当たらないということは、まだ、「くじ」を開いていない父親と母親のどちらかが「くじ」に当たり、両親のどちらか一方が「石打の刑」に処せられて、殺されることを意味している。それにもかかわらず、二人の子供は自分たちが「くじ」に当たらなかったことだけを喜び、これから先、両親のどちらかに起ころうとしている悲劇にまったく関心を示さない。この「くじ引き」では、ある家族が選ばれた場合、自分が助かるか、その家族の他の一人が殺されるか、また、反対に、自分は殺されるが、その家族の他の者が助かるかの選択が待っていることになる。

また、第一回目の「くじ引き」で、Hutchinson 家族が選ばれたとき、Hutchinson 夫妻と Mr. Summers の間で、

“ Bill, ” he (Mr. Summers) said, “ you draw for the Hutchinson family. You got any other households in the Hutchinson? ”

“ There's Don and Eva, ” Mrs. Hutchinson yelled. “ Make them take their chance! ”

“ Daughters draw with their husband's families, Tessie. ” Mr. Summers said gently (p641-p642)

(下線及び括弧内は筆者)

というやりとりがある。Mr. Summers から、「Hutchinson 家に、他に世帯はいないか」と訊かれたとき、Mrs. Hutchinson が「Don と Eva がいる」と答えている。Mr. Summers が「Tessie、娘は夫の家族と(くじ)を引くことになる」と言っていることから想像できるが、おそらく、Eva は Hutchinson 夫妻の娘で、彼女は Don という男性と結婚して、家を出ていると思われる。しかし、Mrs. Hutchinson は「その二人にも、させてみて(くじを引かせて)」と言っている。娘夫妻に「くじ」を引かせれば、どちらかが「くじ」に当たり、「石打の刑」に処せられる可能性があるにもかかわらず、彼女はわざわざこの「くじ引き」に自分の娘を巻

き込むような言い方をしている。この「くじ引き」には、家族の親子関係、子供関係、夫婦関係にまで、大きな傷跡を残す可能性がある。

家族五人全員が「くじ」を引き終わったとき、Old Man Warner が、はっきりとした口調で、

“It's not the way it used to be,” Old Man Warner said clearly. “People ain't the way they used to be.”(p643)

と言う。「くじ引きは昔とは違う」、「人々も昔とは違う」と言っている。読者は、見てきたように、以前の「くじ引き」のやり方が時代とともに世俗化し、変わってきていることは知っているが、それ以上の違いは知らされていない。そのため、Old Man Warner が「くじ引きは昔とは違う」と言っているが、それは彼が時代とともに変わってきた「くじ引き」用品や「くじ引き」方法という外面について言っているのか、それとも、「くじ引き」本来の目的や趣旨が時代とともに変わってしまったと言っているのだろうか。おそらく、「くじ引き」の趣旨が時代とともに変わってしまったという意味で言っているのだろう。そのことは彼が「人々も以前とは違う」と言っていることからある程度推量できる。彼が「人々も以前とは違う」と言っているように、時代とともに人々が変わってきたので、「くじ引きは昔とは違う」面を持つようになったのである。「くじ引き」が以前のような意味を持たなくなってきたのである。

この「くじ引き」は、形式的には、計二回行われている。まず、一回目の「くじ引き」は、家族単位で行われ、一家族が選ばれる。そして、二回目の「くじ引き」では、その選ばれた家族の中から一人が選ばれ、その人を「石打の刑」に処する形になっている。一回目の「くじ引き」で、Mr. Hutchinson が当たりくじを引いてしまったので、彼の家族が選ばれる。そのとき、Mrs. Hutchinson は「くじ引き」の進行役である Mr. Summers に向かって叫ぶ。

“ You (Mr. Summers) didn't give him(Mr. Hutchinson) time enough to take any paper he wanted. I saw you. It wasn't fair.”(p641)

(下線及び括弧内は筆者)

つまり、彼女の夫が当たり「くじ」を引いてしまったのは、彼に「くじ」を選ぶ時間を十分に与えなかったためであり、「それは公平ではなかった」と言っている。前にも書いたが、Hutchinson 夫妻には、四人の子供がいるが、そのうちの一人である Eva は結婚して、家庭を築いているが、Mrs. Hutchinson はその娘 Eva も、自分たちと一緒に「くじ引き」に参加させてくれようと Mr. Summers に頼み込むが、彼は結婚した娘は嫁ぎ先の夫とともに「くじ引き」を引くことになっていると言って、その申し出をやんわりと断る。このときも、それに対して、Mrs. Hutchinson は

“ It wasn't fair ” , Tessie(Mrs. Hutchinson) said.(p642)

(下線及び括弧内は筆者)

と同じ表現を繰り返している。しかし、今度は、前の“ fair ”とは違って、“ fair ”、すなわち、イタリック体になっていて、“ fair ”が強調されている。

さらに、家族五人の中から一人を選び出すための二回目の「くじ引き」が始まろうとしているときも、Mrs. Hutchinson は

“ I tell you it wasn't fair. You didn't give him time enough to choose. *Everybody* saw that. ” (p642)

(下線は筆者)

というように、彼女の夫に「くじ」を選ぶ時間を十分に与えてくれなかったので、「それは公平ではなかった」と同じような表現を使って抗議している。そして、二回目の「くじ引き」では、彼女が選ばれる。彼女は、「石打の刑」に

なる直前に、再び、

“ It isn't fair. ” She (Mrs. Hutchinson) said.(p643)

(下線及び括弧内は筆者)

と叫ぶ。さらに、絶命する直前にも、

“ It isn't fair, it isn't right, ” Mrs. Hutchinson screamed、...(p644)

(下線は筆者、点線部分は省略部分)

と叫んでいる。このときは、彼女は「それは公平ではない」と叫んでいるだけでなく、「それは正しくない」と叫んでいる。

Mrs. Hutchinson は、まだ「くじ引き」が行われている最中に、計五回も、“It isn't(wasn't) fair” という表現を用いている。最初の三回、すなわち、彼女の家族が「くじ引き」で選ばれ、彼女自身が、まだ、選ばれていない時点では、“It wasn't fair” という過去形を用いているが、次の二回、すなわち、彼女が「くじ引き」で選ばれると、“It isn't fair” と現在形を用いている。彼女は、最初の三回では、「くじ引き」のやり方について不満を述べているが、彼女が「くじ引き」で選ばれたあとの最後の二回では、「くじ引き」そのものについて、「それは公平ではない」、「それは正しくない」と言っているように感じられる。彼女が「それは公平ではない」、「それは正しくない」というとき、彼女は「くじ引き」の何が公平でない、何が正しくないと言っているのだろうか。このことについては、後の第三章「くじ引き」と「生け贄」と「石打の刑」の中で、考えてみたい。

第二章 短編小説 *The Lottery* と一幕劇 *The Lottery*

短編小説 *The Lottery* と一幕劇 *The Lottery* を読み比べてみると、この二つの作品から受ける印象は、全体的には、ほぼ同じであると言ってもいいかもしれない。

しかし、形式的に見れば、短編小説 *The Lottery* と一幕劇 *The Lottery* は、それぞれ、異なる文学ジャンルに属しているのが、当然のことながら、表現方法が異なっている。短編小説 *The Lottery* は小説であるので、多くの短編小説がそうであるように、「叙述」の部分が多く、「登場人物」の「台詞」に当たる部分が少ない。それとは反対に、一幕劇 *The Lottery* は劇であるので、わずかな「ト書き」の部分を除けば、すべて「台詞」からのみ成り立っている。短編小説では、「叙述」が支配的であるが、一幕劇では、「台詞」が支配的になっている。それは、一つには、短編小説 *The Lottery* が一幕劇 *The Lottery* に書き換えられるとき、短編小説の「叙述」の多くが、一幕劇では、「台詞」に置き換えられているからである。もちろん、短編小説のすべての「叙述」の部分をも、一幕劇の中で、「ト書き」と「台詞」にそのまま置き換えただけでは、一幕劇にはならない。ときには、それが不可能な場合もある。一幕劇の中では、短編小説の「叙述」にない「ト書き」や「台詞」を付け加えなければならない場合もあり、また、「叙述」にあっても、それを「ト書き」や「台詞」に置き換ええない場合もある。それでは、そうすれば、短編小説は一幕劇になるかということ、そうでもなさそうである。この章では、Duffield が短編小説 *The Lottery* を一幕劇 *The Lottery* に書き換えるとき、どこを、どのようにして、書き換えているかを見てみることにする。そうすることによって、短編小説 *The Lottery* がさらに明確な姿を持つてくるであろう。

前にも引用したが、短編小説 *The Lottery* の冒頭の段落は

The morning of June 27th was clear and sunny, with the fresh warmth of a full-summer day; the flowers were blossoming profusely and the grass was richly green. The people of the village began to gather in the square, between the post office and the bank, around ten o'clock; in some towns there were so many people that the lottery took two days and had to be started on June 26th, but in this village, where there were only three hundred people, the whole lottery took less than two hours, so it could begin at ten o'clock in the morning and still be through in time to allow the villagers to get home for noon dinner.(p636)

となっている。作者 Jackson は、六月二十七日の、おそらく、この小さな村の周囲に見られる豊かな自然を描写することから始めている。「くじ引き」と「石打の刑」が行われる、この六月二十七日の朝は、明るい太陽が輝き、村の周囲には、花が咲き乱れ、草が青々と茂っている、すばらしい日である。村人たちは、十時になったので、郵便局と銀行の間にある広場に集まり始める。Jackson は、この時点で、早くも、「くじ引き」について言及し始めている。いくつかの町では、人口が多すぎるので、「くじ引き」は、前日の六月二十六日とこの六月二十七日の二日を使って行われているが、この村は人口が三百人ほどしかないというえに、「くじ引き」には二時間もかからないので、この日のみで終わってしまう。そのため、十時に始めれば、「くじ引き」後は、家に帰って、昼食が食べられる。この冒頭の段落で、Jackson はこの短編小説の時間が六月二十七日の朝の十時であり、場所が人口約三百人の小さな村の広場であることを明らかにしている。さらに、彼女は、この日、この時間に、この広場で、「くじ引き」が行われるだけでなく、その「くじ引き」がこの地方一帯の町村でも行われていると書いている。

これに対して、Duffield は一幕劇 *The Lottery* の冒頭の「ト書き」に、

The scene is a bare stage with a few stones lying here and there. It represents a village square on the 27th of June of the present year. The stage is in darkness. Gradually a pool of amber light comes up at stage center. Two boys, TOMMY and DICKIE, enter, looking about on the ground. From time to time, one of them picks up a stone and puts it in his pocket. The search should continue for about a minute before either of them speaks.(p101)

(下線は筆者)

と書いている。この「ト書き」の中では、一幕劇では、「それは(場面は)今年の六月二十七日、ある村の広場である」(括弧内は筆者)とあるように、六月二十七日が今年の六月二十七日であると明記されている。短編小説では、ただ六月

二十七日と書かれているだけで、いつの六月二十七日であるのか明記されていない。そのため、過去の六月二十七日にもとれるし、今年の六月二十七日にもとれる。この点だけをとれば、一幕劇のほうが明確である。

この「ト書き」は「場面は、ところどころに、いくつかの「石」が転がっている、裸の舞台である」で始まっている。短編小説の冒頭の豊かな自然の描写と比べると、一幕劇の舞台はいくつかの「石」が転がっているだけで、その他のものは何一つない。どこことなく殺伐としていて、殺風景な印象を与え、むしろ、そこが砂漠や荒野であるかのように感じられ、豊かな自然の中にある広場のように感じられない。Duffield は、この最初の一行、すなわち、そこに転がっている、いくつかの「石」をもって、「石打の刑」の「伏線」を、舞台上で、観客に示している。短編小説の冒頭の段落では、「くじ引き」のことは書かれているが、「石打の刑」については何も書かれていない。しかし、反対に、一幕劇では、「くじ引き」については何も書かれていないが、「石打の刑」については、「伏線」によって、暗示されている。この冒頭の部分に限って言えば、短編小説は「くじ引き」に重きを置き、一幕劇は「石打の刑」に重きを置いていることになる。短編小説を一幕劇に書き換えるとき、「筋」の面から見ると、Duffield は短編小説の'exposition'、すなわち、「導入部」をそのまま、一幕劇の中で、用いようとはしないで、彼独自の「導入部」を創造していることがわかる。その上、この「ト書き」には、「舞台は真っ暗である」と書かれているように、最初は、舞台全体が闇の中にある。やがて、「じょじょに、琥珀色のスポット・ライトが舞台中央で明るくなる」。暗い舞台の中央に、丸く琥珀色のスポット・ライトの円ができると、その照明の円の中へ子供が入場してきて、「石」集めを始める。

このように、短編小説と一幕劇の冒頭を読み比べてみると、その違いは一目瞭然である。短編小説が明るい光と豊かな自然の描写で始まっているのに対して、一幕劇は暗闇の舞台、いくつかの「石」以外には、何一つない、裸の舞台から始まっている。かたや、明るい光と豊かな自然、かたや、暗闇の舞台、いくつかの「石」だけが転がっている、荒野を連想させるような舞台。まさに、

正反対の情景を描いているように感じられる。とても、短編小説とそれを劇化した一幕劇であるとは思われないような、冒頭の書き出しである。短編小説では、これから、「くじ引き」と「石打の刑」が行われる村の周囲の自然描写から始めているのに対して、一幕劇は「石打の刑」で用いられる「石」を「伏線」として、最初から、舞台上に設定している。

短編小説の冒頭の段落では、「くじ引き」が朝の十時に始まり、昼食に間に合うようにと、昼ごろに終わる予定である旨が書かれている。それに対して、一幕劇では、

...a steeple bell has begun to chime, and the amber light widens, gradually illuminating the full stage.(p102)

(下線は筆者、点線部分は省略部分)

とあるように、「(教会の)尖塔の鐘が鳴り始めた」とき、琥珀色の照明の円が広がり、じょじょに、舞台全体が明るくなると書かれている。「場所」は、短編小説でも、一幕劇でも、同様に、村の広場に設定されているが、劇の「時間」に関しては、日にちは、短編小説も、一幕劇も、六月二十七日に設定されているが、具体的な「時間」になると、短編小説では、「くじ引き」と「石打の刑」が十時に始まり、十二時に終わる旨が書かれているが、一幕劇では、「(教会の)尖塔の鐘が鳴り始めた」ときと、書かれているだけで、具体的に、「時間」は設定されていない。そのため、一幕劇では、今年の六月二十七日の何時であるか、わからない。具体的な「時間」に関しては、短編小説のほうが明確である。

短編小説では、教会に関する言及が一つもなく、教会がこの「くじ引き」と「石打の刑」に、どの程度、関わっているのかわからない。この小さな村にも、アメリカの多くの村に教会があるように、教会があると思われるが、教会に関する言及が何一つない。しかし、一幕劇では、少なくとも、教会の尖塔の鐘を合図に、村人たちは「くじ引き」と「石打の刑」に集まってくるので、教会があることだけは確かである。**第一章 短編小説 *The Lottery* の「くじ引き」と「生**

け贖」と「石打の刑」の中でも見てきたように、「くじ引き」と「石打の刑」には、宗教行事を思わせる部分がある。しかし、短編小説では、それが教会、すなわち、キリスト教と関係がある宗教行事か、キリスト教から見れば、異教徒の宗教行事か、どちらの宗教行事と関係があるのか明確にされていない。しかし、後に詳しく述べるが、一幕劇では、それがキリスト教の宗教行事ではなく、「異教徒の慣習」であると明確に述べられている。

短編小説と一幕劇を読み比べてみると、「登場人物」に関して、些細なことだが、一つ気になるところ、というよりも、一つの疑問がある。短編小説では、「くじ引き」に当たり、「石打の刑」に処せられる女性、Mrs. Hutchinson が、最初に、登場したとき、

..., Mrs. Hutchinson came hurriedly along the path to the square,...(p639)

(下線は筆者、点線部分は省略部分)

と書かれていて、“Hutchinson” になっている。もちろん、彼女は、最後まで、“Hutchinson” のままであるが、一幕劇では、彼女が登場したとき、

TESSIE HUTCHISON, wearing an apron over her house dress, enters.(p110)

(下線は筆者)

と書かれている。すなわち、短編小説の“Hutchinson” という名字が、一幕劇では、“HUTCHISON” になっている。小文字、大文字の違いは別にしても、短編小説と一幕劇では、苗字の綴りが異なっている。短編小説では、“H-u-t-c-h-i-n-s-o-n” であるが、一幕劇では、“H-u-t-c-h-i-s-o-n” (比較しやすいように小文字で書く) になっていて、“i” と “s” の間の “n” が抜けている。これは Duffield が、劇化するとき、故意に、“n” だけを抜かして、“H-u-t-c-h-i-s-o-n” にして、あえて、短編小説と一幕劇では、微妙に名字を区別し、一幕劇の独自性を主張したのか。それとも、単なるミスで、“H-u-t-c-h-i-n-s-o-n” とすべきと

ころを“ H-u-t-c-h-i-s-o-n ”にしてしまったのだろうか。確かに、名前としては、“ H-u-t-c-h-i-n-s-o-n ”も“ H-u-t-c-h-i-s-o-n ”も存在するので、その判断は難しい。

筆者には、Duffield が意図的に“ H-u-t-c-h-i-n-s-o-n ”とすべきところを“ H-u-t-c-h-i-s-o-n ”にしたように思える。というのは、彼は、他にも、この名字の場合のように、細かな部分で、短編小説とは異なり、一幕劇を主張しているからである。その例として、村の人口を取り上げて見てみよう。村の人口については、短編小説では、冒頭の段落、

..., but in this village, where there were only about three hundred people,... (p637)

(下線は筆者、点線部分は省略部分)

だけではなく、

..., now that the population was more than three hundred and likely to keep on growing,... (p638)

(下線は筆者、点線部分は省略部分)

においても、言及されている。ここでは、村の人口は約三百人で、これからも、増え続けていきそうであり、この村は人口が少ないものの、わずかづつであるが、繁栄し続けているという印象を与える。それに対して、一幕劇では、村の人口については、二人の「登場人物」、MRS. DUMBAR と MISS BESSOM の「台詞」の中で、語られている。

MRS. DUMBAR: So many of the young ones seem to drift away. This place's(village's) getting' smaller every year.

MISS BESSOM: I know it. Joe Summers told me there's less'n two hundred names on the registration this time. (p105)

(下線及び括弧内は筆者)

と書かれている。一幕劇では、今では、村の人口が二百人以下になり、村の人口は若者の流失により、年々、減ってきている。

短編小説では、村の人口が三百人であり、しかも、現在でも、増え続けているのに対して、一幕劇では、村の人口二百人であり、特に、若者が村を出て行くので、過疎化が進んでいる。この部分だけを取り上げれば、村が与える印象は、短編小説と一幕劇では、正反対であると言ってもいいだろう。人口が増え続けている村で、「くじ引き」と「石打の刑」が行われている場合と、過疎化が進んでいる村で、「くじ引き」と「石打の刑」が行われている場合とでは、「くじ引き」と「石打の刑」の与える意味が違ってくるように感じられる。人口が増え続けている村での「くじ引き」と「石打の刑」はその慣習が、これからも、この村の中で、頑迷に生き残り、なかなか廃れそうもないという印象を与える。それに対して、過疎化が進んでいる村での「くじ引き」と「石打の刑」はその慣習が極めて時代遅れの慣習であり、ある時期には、廃れて無くなってしまふのではないかという印象を与える。言い換えれば、短編小説では、「くじ引き」と「石打の刑」は、未来においても、なくなりそうもないという悲観的ムードが漂っているが、一幕劇では、この慣習は、すぐにとまでは言わないが、いずれそのうち、廃れてしまう慣習であるかもしれないというある程度の楽観的ムードが漂っている。

また、一幕劇では、短編小説に登場しない「登場人物」を登場させている。それは「くじ引き」の進行役である Mr. JOE SUMMERS の姉(原文では、“sister”となっているが、便宜上、「姉」にする)の BELVA である。彼女は、「くじ引き」について、

BELVA(*contemptuously*): The neighbors! If everybody wasn't so scared of their neighbors, maybe we'd give up some heathen customs that don't make sense any more. Half the young folks growin' up don't have the faintest notion what a Lottery stands for.

. . .

BELVA: There's no tellin' these days where the wisdom stops and superstition begins.

(下線は筆者、点線部分は省略部分)

と言っている。すなわち、村人たちは、お互いに、隣人を恐れているので、もはや、何の意味もなくなってしまった「異教徒の慣習」をやめられないでいるだけであり、今では、若者の半分は「くじ引き」の意味をまったく理解していない、と彼女は言っている。彼女は「くじ引き」のことを「異教徒の慣習」と呼んでいる。さらに、彼女は「知恵が働かなくなったとき、迷信が始まる」と言って、「くじ引き」とそれに続く「石打の刑」を、暗に、「迷信」と呼んでいる。短編小説では、この「くじ引き」と「石打の刑」とキリスト教の関係、または、異教の宗教との関係については、明確には、書かれていないが、一幕劇では、この「くじ引き」と「石打の刑」の儀式はキリスト教とは関係のない「異教徒の慣習」であり、「迷信」であると書かれている。Duffield は、短編小説に登場しない「登場人物」BELVA を一幕劇に登場させ、彼女に「くじ引き」と「石打の刑」が「異教徒の慣習」であるとはっきり言わせている。

この一幕劇では、MR. SUMMERS には、姉の BELVA 以外にも、じっさいは、舞台上には、登場しないが、「弟」(原文では、“brother” となっているが、便宜上、「弟」にする)がいる。その「弟」は MR. JOE SUMMERS と BELVA の「台詞」の中のみ出てくる人物である。BELVA は、その「弟」について、

BELVA: ...You(MR. JOE SUMMERS) drove him away. Our own brother and you drove him away.

JOE: It was more your doin' than mine. You're the one brought him up to be a weaklin' and a coward. You started him goin' out on the street and preachin' against tradition.

BELVA: You call that cowardly? It takes a brave man to say what he thinks, when every hand is against him.

JOE (*doggedly*): He left of his own accord. I didn't send him.

BELVA: It takes real courage to fight prejudice on your doorstep. (*With contempt.*)

It's you and the rest of 'em that are the cowards.

(下線及び括弧内は筆者、点線部分は省略部分)

この「台詞」のやりとりを通して見ると、「弟」に関する見方が、MR. JOE SUMMERS と BELVA の二人の間では、極端に分かれている。

MR. JOE SUMMERS は BELVA が「弟」を弱虫で、臆病者に育て上げたので、彼は通りに出て、人々に向かって、伝統(「くじ引き」・「石打の刑」)に反旗を翻すように訴え始めたと言っている。それに対して、BELVA は、すべての村人が反対しているのに、自分の考えを人前で言うのは勇気がいると言っている。さらに、兄である MR. JOE SUMMERS の家の前で、偏見と戦うことは本当に勇気のいることであり、臆病者は MR. JOE SUMMERS や他の村人であると言って、「弟」を擁護している。BELVA は彼がそんな「弟」を追い出したと言って非難しているのに対して、「弟」は自分の意志で出て行ったと言って、彼は反論している。短編小説では、「くじ引き」に反対する「登場人物」については、具体的には、何も書かれていないが、一幕劇では、「くじ引き」の係りである MR. JOE SUMMERS に姉と弟がいるという設定にして、その姉の BELVA と、じっさいには、登場しない「弟」に声高に「くじ引き」に反対させている。そのため、短編小説に比べ、一幕劇のほうが、この村では、「くじ引き」に対する反対の機運が盛り上がっているような印象を与える。この「弟」に関するわずかな言及から、この「弟」が、『新約聖書』の「福音書」の中で、頑迷な因習に凝り固まり、律法だけに固執するパリサイ人に対して、声高に意見を述べるイエス・キリストのイメージを持っていると感じられるのは筆者だけであろうか。

また、短編小説では、第一回目の「くじ引き」で、Hutchinson 家が選ばれ、第二回目の「くじ引き」が始まろうとするとき、Mr. Joe Summers が Bill Hutchinson に子供が何人いるのかと尋ねられたとき、Bill は

“ Three, ” Bill Hutchinson said. “ There's Bill, Jr., and Nancy, and little Dave. And Tessie and me. ” (p642)

と答えている。すなわち、現在の彼の家族は子供三人と夫婦の五大家族である。それに対して、一幕劇では、短編小説の場合と同じ場面で、子供が何人いるのかと尋ねられたとき、BILL HUTCHISON は

HUTCHISON: Just one. Little Davy here. Bill, Jr., he died when he was a baby.(p115)

と答えている。一幕劇では、短編小説に比べると、NANCY がいないだけでなく、BILL, JR.も、子供のとき、亡くなっていて、子供の数は、じっさい、DAVY 一人だけであり、HUTCHISON の家族は三人である。Duffield は、一幕劇に劇化するとき、「登場人物」に関しては、かなり自由に取り扱っていることがわかる。

また、「石打の刑」を行うとき、短編小説では、夫の Bill Hutchinson が妻に向かって「石」を投げつけるところは描写されていない。子供たちについては、

The Children had stones already, and someone gave little Davy Hutchinson a few pebbles.(p643)

と書かれているように、小さな Davy を含む子供たちも、この「石打の刑」に参加して、「石」を投げつけることが暗示されているが、じっさいに、彼らが「石」を投げつけるところは描写されていない。そのため、Davy が母親に向かって、「石」を投げたかと問われれば、投げなかったという他はない。しかし、一幕劇では、HUTCHISON と DAVY について、

HUTCHISON: Be quiet, Tess. We got to do this. (*Throws a stone, and TESSIE flinches, putting her head her brow.*) Come on. Come on, everyone.

(*DAVY throws his fistful of stones. TESSIE utters a cry and sinks to her knees. VILLAGERS throw stones.*)(p117)

と書かれている。すなわち、夫である BILL HUTCHISON が先頭を切って、妻の額を目がけて、「石」を投げつけ、すぐに、他の村人にも「石」を投げるように促している。さらに、小さな DAVY までもが母親めがけて、一握りの小さな「石」を投げつける。

そのため、「石打の刑」に関して言えば、この一幕劇の場面は、短編小説と比べると、はるかに残酷である。それと同時に、この場面は短編小説と一幕劇の違いを際立たせている。短編小説では、夫の Bill Hutchinson が妻に向かって「石」を投げつけるところは描写されていないので、じっさい、夫が妻に向かって「石」を投げつけたのか、投げつけなかったのかわからない。夫は「石」を投げつけたような気もするし、また、投げつけなかったような気もしてくる。すなわち、作者はその部分を明確にしていない。また、子供の Davy も「石」をわたされたところまでは描写されているが、母親に「石」を投げつけたか、投げつけなかったかはわからない。彼は「石」をわたされたので、投げつけた可能性が高いが、じっさいに、投げつけたところは描写されていない。すなわち、短編小説では、夫と子供が妻であり、母である Tessie に「石」を投げつけたかどうかという部分は読者の想像に任されている。しかし、「石打の刑」が舞台上で上演される時は、夫や子供が TESSIE に向かって、「石」を投げつけたかどうかかわからないという状況は許されない。彼らが「石」を投げつけたのか、投げつけなかったかのどちらか一方を選ばなければならない。観客が、じっさいに、その「石打の刑」の場面が目の前で演じられているのを見ているので、夫や子供が「石」を投げるのか、投げないのかが、すぐに、わかるのである。そのため、短編小説を劇化するときは、彼らに「石」を投げつけさせるのか、投げつけさせないのか、どちらか一つを選択しなければならない。それで、Duffield は、選択の結果、夫と子供が「石」が彼女に対して「石」を投げつけるほうを選んだのである。

短編小説とは異なって、劇においては、観客の立場から見れば、「登場人物」、及び、彼らの行為、「背景」は、舞台上においては、原則として、視覚化される。

第三章 「くじ引き」と「生け贄」と「石打の刑」

「くじ引き」と『旧約聖書』

The Lottery の「筋」は単純である。ある村の広場で、六月二十七日になると、毎年、恒例となっている、村人全員が参加する「くじ引き」が行われ、それによって選ばれた一人が、その「くじ引き」の直後に、やはり、村人全員が参加する「石打の刑」で殺されるという「筋」である。そのため、この短編小説では、「くじ引き」と「石打の刑」が、「筋」の中では、とりわけ、重要な意味を持っている。

現代のアメリカでは、日本と同様に、「くじ引き」はありふれたものであるが、「石打の刑」という処刑方法は、はるか昔、数千年も前に行われていた、最も単純な処刑方法であり、現代社会においては、けして行われるはずがない処刑方法であると言ってもよいだろう。しかし、この短編小説では、現代社会で、慣れ親しんでいる「くじ引き」と、「石打の刑」という、およそ、日常会話の中では、聞いたこともないような処刑方法が結びついている。そのため、「くじ引き」の結果、「石打の刑」に処せられるという流れは何かちぐはぐな感じを与え、しっかりと納まらない。何故、「くじ引き」の結果が「石打の刑」による死なのか。しかし、それにしても、何故、村人たちは一人の人を選び出すのに「くじ引き」を用い、人を殺すのに「石打の刑」を用いなければならなかったのだろうか。何も、人を選ぶのに、「くじ引き」をする必要はないし、まして、人を殺すのに、「石打の刑」に処する必要はどこにもないように思える。人を選ぶのに、「くじ引き」以外の方法があるようにも思えるし、人を殺すのに、「石打の刑」以外の方法があるようにも思える。何故、この村では、毎年、六月二十七日と

いう決まった日に、「くじ引き」で選ばれた者が「石打の刑」で殺されなければならないのか。この短編小説では、その理由が明らかにされていない。そのため、本来なら、「くじ引き」で選ばれ、「石打の刑」で殺されるということは、殺される本人にとっては、極めて理不尽であり、不条理であるように感じられるはずであるが、この村では、そのことに対して、あまり声高に意見を述べる人はいないように思える、

現代社会では、この作品とは違って、「くじ引き」と「石打の刑」、すなわち、「くじ引き」の結果が、即、「石打の刑」による死をもたらすことは皆無であると言ってもいいだろう。それが皆無であるというよりも、そもそも、「くじ引き」の結果と「石打の刑」による死が関係づけられて語られることすらありえないと思われる。それでは、何故、作者 Jackson は、現代の村の中に、「くじ引き」

「石打の刑」という形を持ち込んだのだろうか。現代の農村と「くじ引き」「石打の刑」とでは、お互いに、あまりにもかけ離れていて、相容れないものどうしのように見える。異物どうしの組み合わせ、水と油の組み合わせのように感じられるほどである。しかし、この短編小説を読んだ読者はこの村と「くじ引き」「石打の刑」の関係が溶け合って、化学反応を起こし、それぞれとはまったく異なったものが生まれてきていることに気がつかされる。

通常、現代社会では、「くじ引き」は、宝くじのような形をとると、突然、大金をもたらすもの、幸運をもたらすものという印象が強く、宝くじを買うときには、人々は、もしかしたら、当たるかもしれないという夢を抱く。また、「くじ引き」は、選択方法として、ジャンケンやコイン投げのように、あるグループの中で、誰か、または、何かを選ぶときに、使われるのが普通である。そのため、「くじ引き」そのものが、この作品のように、死(「石打の刑」)を連想させることはないと言っても過言ではないだろう。しかし、この短編小説以外にも、「くじ引き」と「石打の刑」が並んで存在していた世界がある。そこでは、この短編小説と同様に、「くじ引き」で選ばれた者が、やはり、即、「石打の刑」で処刑されている。それは『旧約聖書』の世界である。『旧約聖書』では、「くじ」という語はかなり頻繁に使われ、九十回前後も出てくる。それに対して、

『新約聖書』では、六回、その十数分の一にも満たない回数しか出てこない。そのため、「くじ引き」は、主として、『旧約聖書』の世界に根ざしたものであるとすることができる。ユダヤ教やキリスト教の聖典である『旧約聖書』の中に、これほど多くの「くじ」という語が出てくること自体、何か不思議な感じがするが、「くじ引き」が持っている、本来の特徴を思い出すと、ある程度、納得がいく。

本来、「くじ引き」には、「くじ」を引く人の意思も、それを見ている人の意思も、いや、いかなる人の意思も入り込む余地がまったくない。それが「くじ引き」の本来あるべき姿であろう。誰かの意思が入り込んだ場合は、その「くじ引き」は、いわゆる、いかさまとなり、本来の「くじ引き」の性格を失ってしまう。その場合、それは、もはや、「くじ引き」ではない。そのため、人々は、「くじ引き」では、運、または、あるとしたら、人間以外の何かの力や意思が働いているように感じる。そのため、「くじ」を引く人が善人であろうが、悪人であろうが、老人であろうが、子供であろうが、また、男であろうが、女であろうが、そのことと「くじ引き」の結果との間には、何ら直接的な因果関係は存在しない。「くじ」に当たる確率は、その「くじ引き」に参加したすべての人にとっては、同じである。「くじ引き」の結果は、あくまで、「くじ」を引いた、その人の運にかかっていると考えられているので、「くじ引き」は、参加する人々にとって、等しく、公平である。誰にとっても、「くじ」に当たる確率も同じであるのと同時に、「くじ」に当たらない確率も同じである。かくして、「くじ引き」は理想的なギャンブルとなる。

この作品では、「くじ引き」の結果、Mrs. Hutchinson が選ばれるが、その選択方法がギャンブルの性格を持つ「くじ引き」であるがゆえに、彼女は自分が「くじ引き」によって選ばれた責任を他の村人たちに負わせることができない。彼女の「くじ引き」は彼女自身が引いたのであり、他の村人たちが引いたわけではない。彼女の「くじ引き」の結果には、他の村人たちの意思が反映されたわけではない。やはり、彼女が引いた「くじ引き」の結果について、誰かに責任があるとすれば、それは、その「くじ」を引いた本人であると村人たちは考え

るだろう。それゆえ、「くじ引き」に当たらなかった村人全員は、彼女を選んだのは彼女自身であり、自分たちではないと考え、彼女が「くじ引き」で選ばれたことの責任を回避することができる。それだけではなく、自分たちが選ばなかったことに対して、安堵の気持ちさえ持つかもしれない。そして、他の村人たちはなにがしかの罪意識からも解放されることができる。

「くじ引き」は、本来、ギャンブルである。村人たちは、Mrs. Hutchinson が殺人等の何か重大な刑法上の罪を犯したか、道徳上の大罪を犯したために、彼女を「石打の刑」に処したのではない。それが証拠に、彼女は「石打の刑」に処されるに先立って、警察に逮捕されることもなかっただけでなく、裁判を受けることもなかった。「石打の刑」は彼女に対する公正な裁判の結果ではない。彼女は、裁判とは異なって、人間の意思が働くことができない「くじ引き」というギャンブルの結果を持って、「石打の刑」に処せられた。そのため、彼女に対する「石打の刑」は、一見すると、アメリカの歴史の中に、しばしば、見かける、ある種のリンチであるようにも思える。しかし、よく考えてみると、彼女が「くじ引き」によって選ばれ、その結果、「石打の刑」で殺されたからといって、それをリンチと呼ぶことはできないように思える。人をリンチにする理由は、たいてい、理不尽で、一方的である場合が多いが、それでも、リンチをする側から見れば、リンチを受ける人は何らかの罪を犯した者が、または、彼らによって、地域社会によって、危害をもたらす者と烙印を押された者でなければならないのが普通である。つまり、ある人をリンチにする場合、リンチする側に、何がしかの大義名分がなければならない。何の理由もつけず、むやみに、手当たりしだいに、人をリンチにすることはできない。また、もし「くじ引き」「石打の刑」がリンチであるなら、この「くじ引き」のように、毎年、決まった日時、六月二十七日の朝十時に、この村だけではなく、この地方一帯で、行われるはずもない。毎年、決まった時に行われる「くじ引き」による「石打の刑」をリンチと呼ぶことはできない。

この作品では、Mrs. Hutchinson が何か罪を犯したとはどこにも書かれていない。彼女はごく平凡な一人の主婦であり、妻であり、母である。しかし、村人

たちは、あらかじめ、毎年、六月二十七日に、一人の人間の命を「石打の刑」によって奪うことを前提にして、「くじ引き」を行い、しかも、それに子供までも含む村人全員を参加させている。この「くじ引き」という儀式は、この地域に入植が始まって以来、その形は時代とともに変わることがあっても、毎年、行われ、現在に至るまで続いている。そのため、この「くじ引き」は村の誕生以来の長い伝統を持っている。さらに、この「くじ引き」には、子供を含めて、村人全員が参加しているため、それはある特定の人や個人の出来事ではなく、れっきとした伝統的な公的行事である。公的な行事は、通常、建前として、その地域社会にとって、善であり、正義の表れでなければならない。公的な行事が、地域社会にとって、悪と不正をもたらすことなど、通常、考えられない。それゆえ、村人たちは、わずかな人を除いて、自分たちが行っている「くじ引き」は善であり、正義であると思っている。毎年、決まった日時に、地域社会にとって、善である「くじ引き」を行い、その「くじ引き」で選ばれた人を善である「石打の刑」に処するのは、リンチではなく、むしろ、「生け贄」に近い。彼女は、村人たちによって、リンチにされたのではなく、「生け贄」にさせられたのである。そのため、「くじ引き」は、毎年、「生け贄」にする人を選ぶために行われていることになる。この村では、毎年、「くじ引き」で選ばれた一人を「生け贄」にするために「石打の刑」で殺していることになる。このことは「くじ引き」「石打の刑」という儀式の目的が殺人であり、その殺人を正当化するために「くじ引き」「石打の刑」という形をとっているのではないか。

「くじ引き」には、いかなる人間の意思も入り込むことができないので、『旧約聖書』の世界においては、もし「くじ引き」に入り込む意思があるとすれば、それは神の意思だけであると考えられていたのだろう。創造神である神の意思は人間の意思が及ぶ範囲はもちろんのこと、人間の意思が及ばない範囲にも及んでいると考えたのである。それゆえ、『旧約聖書』の時代の人々は、「くじ引き」には、神の意思が反映されていると考えた。彼らにとっては、「くじ引き」は神の意思を知るための一手段であった。ここに、彼らが「くじ引き」を重要視した理由がある。それに対して、『新約聖書』では、「くじ引き」の持つ別の

側面が強調されている。前にも書いたが、『旧約聖書』では、九十回前後にわたって、「くじ」という語が使われているが、『新約聖書』では、たったの六回である。しかも、そのうちの五つが、四つの「福音書」の中で、イエスが十字架刑にかけられたとき、その十字架刑の仕事に従事していたローマ兵たちが、イエスの衣服が誰のものになるかを決めるために、「くじ」を引いているときに使われている。ちなみに、その部分は、「マタイによる福音書」では、第二十七章第三十五節、日本語訳では、

35 .彼らはイエスを十字架につけてから、くじを引いて、その着物を分け、、、
(下線は筆者、点線部分は省略部分)

英語訳では、

35. And when they had crucified Him, they divided up His garments among themselves, casting lots;

(下線は筆者、点線部分は省略部分)

となっている。以下、同じ場面で、「マルコによる福音書」で、一回、「ルカによる福音書」で、一回、「ヨハネによる福音書」で、二回、「くじ」という語が使われている。ということは、「福音書」では、「くじ」という語はすべてローマ兵たちが処刑されたイエスの衣服を手に入れるために「くじ」を引いている場面で使われていることになる。これは、『旧約聖書』で、神の心を知るために、「くじ」を引いたのに対して、『新約聖書』のイエスの処刑の場面では、「くじ」はその聖なる側面を失って、人間の物欲を満たすためのギャンブルとして使われている。「くじ」の持つ意味が、「福音書」では、完全に世俗化している。

それでは、『新約聖書』には、「くじ」の持つ聖なる側面がまったくないかという、そうでもない。「くじ」の聖なる一面も残っている。その六回のうちの一回(下の引用文からもわかるように、日本語訳では、一回であるが、英語訳で

は、二回である)だけではあるが、「くじ」という語は、「使徒行伝」の中で、用いられている。それは、十二弟子の一人、ユダがイエスを裏切り、イエスが十字架刑で処刑された後、残された使徒たちが、十二弟子から十一弟子となってしまったため、一人、その欠員を補うために、ユストとマッテヤという信者の中から、「くじ」によって選ぶときである。その部分は、「使徒行伝」第一章第二十六節には、

26 .それから、二人のためにくじを引いたところ、マッテヤに当たったので、この人が十一人の使徒たちに加えられることになった。

(下線は筆者)

英語訳では、

26. And they drew lots for them and the lot fell to Mathias; and he was numbered with eleven apostles.

(下線は筆者)

となっている。使徒たちは、「くじ」を引く前に、神に祈り、神の意思を聞こうとしている。そのため、彼らはその「くじ引き」の結果を神の意思の表れとしてとらえている。これは『旧約聖書』で書かれている「くじ引き」に関する考えと似ている。そのため、『旧約聖書』の「くじ」に関する考えが、わずかではあるが、『新約聖書』にも残っていることになる。

これらの『聖書』の記述を通して、「くじ引き」に関する考えが、ローマ兵を含むローマ人とユダヤ人とは違っているとも考えられるが、また、『旧約聖書』の時代から『新約聖書』の時代に移る過程において、「くじ引き」に関する考えが変化してきているとも考えられる。それは『旧約聖書』においては、「くじ」という語が九十回ほど出てくるのに対して、『新約聖書』では、わずか、六回であることも、そのことを指し示しているのではないだろうか。『新約聖書』で

は、『旧約聖書』に比べると、神の意志を知るための手段として、「くじ」に頼ることが極端に減っていることがわかる。

ここでは、『旧約聖書』の中で、九十近くある「くじ」に関する言及の中から、二箇所だけ「くじ」という語を選び、その語の使われ方を見てみることにする。まず、「民数記」の第三十六章第二節、日本語訳では、

2. ... 「イスラエルの人々に、その嗣業の地をくじによって与えることを主はあなたに命じられ、あなたもまた、われわれの兄弟ゼロペハデの嗣業をその娘たちにあたえるよう、主によって命じられました。

(下線は筆者)

英語訳では、

2. ... “ The Lord commanded my lord to give the land by lot to the sons of Israel as an inheritance, and my lord was commanded by the Lord to give the inheritance of Zelophehad our brother to his daughters.

(下線は筆者)

となっていて、神は、「くじ」によって、イスラエルの人々に「嗣業の地」を与えるように命じている。ここでは、「くじ」の結果が神の意思の表れであることが示されている。

さらに、「イザヤ書」第三十四章第十七節、日本語訳では、

17. 主は彼らのためにくじを引き

手ずから測りなわをもって、この地を分け与え、

長く彼らに所有させ、

世々ここに住まわせられる。

(下線は筆者)

英語訳では、

17. And He has cast the lot for them,

And His hand has divided it to them by line.

They shall possess it forever,

From generation to generation they shall dwell in it.

(下線は筆者)

となっている。ここでは、神が自ら「くじ」を引いている。神と「くじ」はひとつのものであり、「くじ」の結果は神の御心なのである。『旧約聖書』の時代では、「くじ」の結果は神の意思の表れなのである。*The Lottery* の中では、村人たちが「くじ引き」をしたとき、その結果を神の意思の表れと思っていたのだろうか。

この「民数記」と「イザヤ書」の引用文は、神がイスラエルの民に「嗣業の地」を分け与えるために、「くじ」を使っている。そのため、「くじ」は、イスラエルの民にとっては、「嗣業の地」を分け与えるという神の恩寵の一端を表していることになる。結果的に、彼らは、「くじ」を通して、「嗣業の地」を手に入れることができた。しかし、『旧約聖書』「ヨシュア記」第七章では、上の「民数記」や「イザヤ書」の引用文とは異なり、神の「くじ」が別の一面、いや、正反対の面も持っていることが語られている。そこでは、「くじ」は神の恩寵の一端ではなく、神との契約を破った者を選び出し、その選び出されたものを処刑するための手段として使われている。「くじ」で選び出された人が処刑されるという点だけを取り上げれば、短編小説 *The Lottery* の「くじ引き」と「ヨシュア記」の「くじ」の間には、類似点が見られる。しかし、*The Lottery* と「ヨシュア記」を比較してみると、そこには、類似点だけではなく、相違点も見られる。

「ヨシュア記」第七章第一節には、日本語訳で、

1 . しかし、イスラエルの人々は奉納物について罪を犯した。すなわち、ユダの部族のうちの、ゼラの子ザブデの子であるカルミの子アカンが奉納物を取ったのである。それで主はイスラエルの人々にむかって怒りを発せられた。

英語訳では、

1. But the sons of Israel acted unfaithful in regard to the things under the ban, for Achan, the son of Carmi, the son of Zabdi, the son of Zerah, from the tribe of Judah, took some of the things under the ban, therefore the anger of the Lord burned against the sons of Israel.

と書かれている。ここでは、アカンが神への奉納物を盗んだこと、すなわち、神との契約を破ったことに対して、神が怒りを発した旨が書かれている。

さらに、「ヨシュア記」第七章第十節には、日本語訳で、

10 . 主はヨシュアに言われた、「立ちなさい。あなたは どうして、そのようにひれ伏しているのか。11 . イスラエルは罪を犯し、わたしが彼らに命じておいた契約を破った。彼らは奉納物を取り、盗み、かつ偽って、それを自分の所有物に入れた。12 . それでイスラエルの人々は敵に当たることができず、敵に背をむけた。彼らもほろぼされるべきものとなったからである。あなたがたが、その滅ぼされるべきものを、あなたがたのうちから滅ぼし去るのでなければ、わたしはもはやあなたがたとは共にいないであろう。

(下線は筆者)

英語訳では、

10. So the Lord said to Joshua, "Rise up! Why is it that you have fallen on your face? 11. "Israel has sinned, and they have also transgressed My covenant which I

commanded them. And they have even taken some of the things under the ban and have both stolen and deceived. Moreover, they have also put them among their own things. 12. “Therefore the sons of Israel cannot stand before their enemies; they turn their backs before their enemies, for they have become accursed. I will not be with you anymore unless you destroy the things under the ban from your midst.

(下線は筆者)

と書かれている。

ここでは、神は、ヨシュアに向かって、罪を犯した者を探し出し、その者を処刑しなければ、これから先、イスラエルの民と共にいることはないと言っている。イスラエルの民が神から見捨てられないためには、どうしても罪を犯した者を探し、処刑しなければならない。この罪を犯した者、すなわち、アカンを探し出すために、神はイスラエルの民に「くじ」を用いることを命じている。しかし、*The Lottery* では、村人の中から、神との契約を破り、罪を犯した Mrs. Hutchinson を選び出すために「くじ引き」が行われたのではない。前もって、毎年、一人を「くじ引き」で選び出し、「石打の刑」に処することが決まっているので、たまたま、Mrs. Hutchinson が「くじ引き」によって選ばれ、「石打の刑」によって処刑されたのである。彼女自身は、「ヨシュア記」のアカンとは違って、何の罪も犯していない。それにもかかわらず、「くじ引き」で選ばれ、「石打の刑」で殺された。「ヨシュア記」では、アカンは神への奉納物を盗み、自分の所有物とするという罪を犯している点で、*The Lottery* の Mrs. Hutchinson とは異なっている。

The Lottery では、「くじ引き」は、二回にわたって、行われている。まず一回目では、家長が、一人ずつ、「くじ」を引いていく。その結果、一家族が選ばれる。二回目は、その選ばれた家族の全員が、一人ずつ、「くじ」を引く。その結果、家族の一人が選ばれる。すなわち、最初は、家族が選ばれ、次に、その家族の中から、その一員が選ばれるという形をとっている。これと同じ「くじ引き」の方法が、上の引用文に続く「ヨシュア記」第七章第十三節から第十五節

に書かれている。その部分は、日本語訳では、

13 . 立って、民を清めて言いなさい、『あなたがたは身を清めて、あすのために備えなさい。イスラエルの神、主は仰せられる、「イスラエルよ、あなたがたのうちに、滅ぼされるべきものがある。その滅ぼされるべきものを、あなたがたのうちから除きさるまでは、敵に当たることはできないであろう。』
14 . それゆえ、あすの朝、あなたがたは部族ごとに進み出なければならない。そして主がくじを当てられる部族は、氏族ごとに進みいで、主がくじを当てられる氏族は、家族ごとに進みいで、主がくじを当てられる家族は、男ひとりびとり進み出なければならない。 15 . そしてその滅ぼされるべきものを持っていて、くじを当てられた者は、その持ち物全部と共に、火で焼かれなければならない。主の契約を破りイスラエルのうちに愚かなことを行ったからである。

(下線は筆者)

英語訳では、

13. " Rise up! Consecrate the people and say, 'Consecrate yourselves for tomorrow, for thus the Lord, the God of Israel, has said, " There are things under the ban in your midst, O Israel. You cannot stand before your enemies until you have removed the things under the ban from your midst. 14. 'In the morning then you shall come near by your tribes. And it shall be that the tribe which the Lord takes by lot shall come near by families, and the family which the Lord takes shall come near by households, and the household which the Lord takes shall come near man by man. 15. 'And it shall be that the one who is taken with the things under the ban shall be burned with fire, he and all that belongs to him, because he has transgressed the covenant of the Lord, and because he has committed a disgraceful thing in Israel.

(下線は筆者)

となる。

ここでは、「主がくじを当てられる部族は、氏族ごとに進みいで、主がくじを当てられる氏族は、家族ごとに進みいで、主がくじを当てられる家族は、男ひとりひとり進み出なければならぬ」とあるように、神は「くじ」で、まず、イスラエルの民の中から、一つの部族を選び、その部族の中から、一つの氏族を選び、その氏族の中から、一つの家族を選び、その家族の中から、一人の男を選ぶ、と言っている。つまり、最初は、一番大きな集団から始め、じょじょに、より小さな集団へと、「くじ」の対象が移っていく。*The Lottery*でも、「くじ引き」で、まず、一番大きな集団である村人の中から、Hutchinson 一家が選ばれ、その家族の中から、家族の一員である妻の Tessie が選ばれたのち、彼女が「石打の刑」で殺されるが、この点では、「くじ引き」の仕方が「ヨシュア記」と酷似している。

さらに、続く「ヨシュア記」第七章第十六節から第十八節、及び、第二十五節には、日本語訳では、

16．こうしてヨシュアは朝早く起き、イスラエルを部族ごとに進み出させたところ、ユダの部族がくじに当たり、17．ユダのもろもろの氏族を進み出させたところ、ゼラびとの氏族が、くじに当たった。ゼラびとの氏族を家族ごとに進み出させたところ、ザブテの家族が、くじに当たった。18．ザブテの家族を男ひとりひとり進み出させたところ、アカンがくじに当たった。アカンはユダの部族のうちの、ゼラの子、ザブデの子なるカルミの子である。、、、
25．そしてヨシュアは言った、「なぜあなたはわれわれを悩ましたのか。主は、きょう、あなたを悩ませるであろう」。やがてすべてのイスラエルびとは石で彼を撃ち殺し、また彼の家族をも石で撃ち殺し、火を持って焼いた。

(下線は筆者、点線部分は省略部分)

英語訳では、

16. So Joshua arose early in the morning and brought Israel near by tribes, and the tribes of Judah was taken. 17. And he brought the family of Judah near, and he took the family of the Zerahites; and he brought the family of the Zerahites near man by man, and Zabdi was taken. 18. And he brought his household near man by man; and Achan, son of Carni, son of Zabdi, son of Zerah, from the tribe of Judah, was taken.... 25. And Joshua said, “Why have you troubled us? The Lord will trouble you this day.” All Israel stoned them with stones; and they burned them with fire after they had stoned them with stones.

(下線は筆者、点線部分は省略部分)

となっている。

ここでは、ヨシユアは、まず、イスラエルの民を部族ごとに進み出させ、「くじ」を引かせたところ、ユダの部族が「くじ」に当たり、次に、ユダのもろもろの氏族を進み出させ、「くじ」を引かせたところ、ゼラびとの氏族が、「くじ」に当たった。そして、さらに、ゼラびとの氏族を家族ごとに進み出させ、「くじ」を引かせたところ、ザブテの家族が、「くじ」に当たり、次に、ザブテの家族の男ひとりびとりを進み出させ、「くじ」を引いたところ、アカンが「くじ」に当たった。ユダの部族の中で、ゼラの子、ザブデの子なるカルミの子であるアカンが「くじ」によって選ばれたのである。イスラエルの民は神への奉納物を盗んだアカンを「石」で撃ち殺したあと、彼の家族のものも「石」で撃ち殺し、その上、彼らを火で焼いている。彼らは奉納物を盗んだアカンだけではなく、彼の家族の者も彼と同罪と見なして、「石打の刑」に処している。また、その際、「すべてのイスラエルびと」と書かれているように、この「石打の刑」にはイスラエルの民全員が参加している。

The Lottery においても、

The children had stones already, and someone gave little Davy Hutchinson a few pebbles.(643)

とあるように、「石打の刑」には、大人だけではなく、「石」を持つことができるほど大きくなった子供たちも参加しているので、村人全員が参加していると言っている。それだけではなく、Mrs. Hutchinson の子供 Davy にも「石」が渡されている。ということは、小さな Davy さえも母親に対して「石」を投げるように指導されていることになる。じっさいは、書かれてはいないが、このことは夫の Hutchinson も妻に対して「石」を投げつけることになっていると考えていいだろう。「くじ引き」で、家族の一員が選ばれた場合は、その人が妻、夫、母、父、子供であろうが、その家族の他の者たちもその人に「石」を投げつけなければならないことを意味している。ところが、「ヨシュア記」では、罪を犯したものだけではなく、家族全員が「石打の刑」にあって殺されるため、家族の者が同じ家族の一員の「石打の刑」の執行者になることはない。しかし、*The Lottery* では、「くじ引き」で、ある人が選ばれた場合、その家族の者も、「石打の刑」のとき、「石」を身内の者に投げつけるもの、すなわち、「石打の刑」の執行者にしなければならない。これは、ある意味では、「ヨシュア記」の場合よりも、さらに残酷であると言えないだろうか。

家族の一員が「石打の刑」に処されるとき、その家族もその執行に参加しなければならないことが義務づけられているとすると、これは犯罪者の処刑ではなく、「生け贄」の色彩が強いことになる。

「生け贄」と『旧約聖書』

「くじ引き」の結果、Mrs. Hutchinson は、ある種の「生け贄」となって、「石打の刑」によって殺されたと考えていいだろう。「くじ引き」「生け贄」「石打の刑」に処せられたのは彼女一人だけではない。この村では、毎年、六月二十七日に、一人ずつ、「くじ引き」で選ばれ、「石打の刑」にあってきた。ということは、今までに、すでに、もう何十人、いや、三桁の数字に及ぶ村人が「くじ引き」で選ばれ、「石打の刑」で殺されてきたことになる。この村の人口は三百人あまりなので、三桁の数字の人が殺されてきたということは、累計で、全

人口の三分の一以上の村人が殺されてきたということである。これは恐るべき数字である。何故、これほど多くの村人が「くじ引き」で選ばれ、「石打の刑」で処刑されなければならなかったのか。これほどの犠牲を払って、いったい、村人たちは何を手に入れたというのだろうか。

Old Man Warner の言葉がそのことを考えるヒントを与えてくれる。彼は

... “ Lottery in June, corn be heavy soon”...(p641)

(点線部分は省略部分)

すなわち、「六月にくじ引きをすれば、すぐに、トウモロコシが豊作になる」という、おそらく、村に古くからある言い伝えを引用している。この言い伝えの中では、「くじ引き」と、それに続く「石打の刑」がトウモロコシの収穫と関係づけられて語られている。そのため、この村では、トウモロコシの豊作をもたらすために、毎年、六月二十七日に、「くじ引き」と「石打の刑」が行われていると考えていいだろう。それと同時に、この「六月にくじ引きをすれば、すぐに、トウモロコシが豊作になる」という言い伝えの背後には、もし六月に「くじ引き」をしておかなければ、とてもトウモロコシの豊作は望めそうもないという恐れが隠れているように感じられる。トウモロコシの豊作が望めそうにない状況とは、言うまでもなく、トウモロコシの収穫に適さない天候が長く続くことを意味する。それは雨の量が極端に少なく、早魃の日々が長く続いた場合や、反対に、雨ばかり降り、ほとんど太陽が顔を出さない日々が長く続くことなどを意味する。これは農業が主なる産業である、この村では、天候が悪く、収穫が望めないということは、まさに、死活問題である。

前にも引用したが、Old Man Warner は、「くじ引き」の最中に、

..., they'll be wanting to go back to living in caves, nobody work any more, live that way for a while. Used to be a saying about Lottery in June, corn be heavy soon. First thing you know, we'd all be eating stewed chickweed and acorns. There's

always been lottery,” he added petulantly... (p641)

(下線は筆者、点線部分は省略部分)

と言っている。彼は、この村では、いつも、「くじ引き」をしてきたので、収穫が続いてきたと思っている。彼は、いま、「くじ引き」をやめれば、再び、洞穴生活へ逆戻りし、誰も働かなくなり、やがて、ハコベやドングリのシチューを食べて暮らすはめになると言っている。この村では、どういう過程を経てきたのかわからないが、「くじ引き」と「石打の刑」が穀物の豊作祈願、すなわち、天候祈願と結びついている。

この村では、「くじ引き」で選ばれた者が、必ず、豊作祈願のために、「石打の刑」で殺されているので、「くじ引き」で選ばれた者は豊作を祈願するための「生け贄」にさせられていると考えていいだろう。豊作のための「生け贄」、「生け贄」をもって、豊作を祈願するという考えは、まだ文明が発達する以前の農業社会では、ありえたかもしれないが、現代の農村では、ありえないように思える。しかし、作者 Jackson は、現代では、とうの昔に、過去の遺物となり、すでに廃れてしまったと思われる慣習、豊作のために「生け贄」をするという儀式を、あえて、現代の農村社会へ持ち込んで描いている(もちろん、現代と言っても、この作品が書かれたのは、1948年、すなわち、第二次世界大戦後三年しか経っていないときで、ゆうに半世紀以上も前のことであるが)。彼女が豊作のための「生け贄」という図式を現代の農村に持ち込んだということは、この図式と同じもの、必ずしも、同一のものではないにしても、かなり類似した図式を、現代社会の中に、見出していた可能性がある。

この作品が書かれた1948年当時では、人々の間では、第二次世界大戦の傷跡、特に、ナチによるユダヤ人迫害・虐殺の記憶がまだ生々しく残っている時代であり、大戦後のユダヤ人の問題は、欧米社会にとっては、大きな問題であった。当時の歴史を振り返れば、欧米社会の主導の下、この年の五月に、イギリスの委任統治領であった Palestine に、Israel が建設されている。そして、1948年の五月という、この時期はこの年の *The New Yorker* 六月二十八月号に掲載さ

れた *The Lottery* の発表時期とほぼ重なる。Vermont 州の片田舎 Bennington に住んでいた作者 Jackson の耳にも、大戦中のナチによるユダヤ人の迫害・虐殺、さらには、それに続く Israel 建国に関する報道は、ラジオや新聞等を通して、しばしば、届いていたに違いない。世界史においても、大きな出来事である、ユダヤ人の迫害・虐殺、それに続く、Israel 建国は、まさに、同時代を生きていた彼女にとっては、この作品を書くにあたって、大きな原動力になったのではないと思われる。この作品とナチによるユダヤ人迫害・虐殺との関係は、この作品が書かれた時期からも、ある程度は、推測できる。しかし、それ以外にも、「くじ引き」と『旧約聖書』の中で見てきたように、また、この「生け贄」と『旧約聖書』でも、次の「石打の刑」と『旧約聖書』でも、詳しく触れることになるが、この作品の中で重要な意味を持つ「くじ引き」、「生け贄」、「石打の刑」というキーワードはユダヤ教の聖典である『旧約聖書』の中に数多く見られることも、この作品とナチによるユダヤ人迫害・虐殺との関係を感じさせる。

彼女が、この作品を書くにあたって、『旧約聖書』から、いわば、「くじ引き」、「生け贄」、「石打の刑」という文学的「原型」を借りていることは確かであろう。しかし、彼女は『旧約聖書』の世界における「原型」を、作品の中で、そのまま使うのではなく、作品の「筋」に合わせて、少しずつ、その性格を変えて用いている。彼女は『旧約聖書』の時代の慣習を現代の村に持ち込むことによって、何を書こうとしたのだろうか。この「くじ引き」、「生け贄」、「石打の刑」という図式はナチのユダヤ人迫害・虐殺と何らかの関係があると考えていいのだろうか。確かに、ユダヤ人は、ナチによって、あたかも「くじ引き」で選ばれたかのように、標的として選ばれ、迫害を受け、「石打の刑」で処刑されるかのように、ガス室で虐殺された。彼女は、ナチのユダヤ人に対する、これらの行為の中に、見たものを、この作品の中で、描こうとしたのだろうか。それとも、あえて、そのような歴史的に大きな出来事だけに目を向けずに、もっと身近で、平凡な日常生活の中に、ナチによるユダヤ人の迫害・虐殺の小型版、縮小版を見てとったので、彼女はこの作品を書いたのだろうか。彼女はナチに

よるユダヤ人の迫害・虐殺の問題はナチだけに限られた問題ではなく、すべての人の問題であると考えたのだろうか。彼女は、これと同じような図式は、我々の社会のいたるところで、見出せる図式と考えたのであろうか。たとえば、ある会社で不正が発覚したとき、それが会社ぐるみの不正であるにもかかわらず、ある社員だけに責任を取らせて、会社や他の者がその責任から逃れる場合などが、その図式に当てはまると考えていいのだろうか。また、たまたま、ある子供が、何らかの理由で、他の子供たちから、いじめの標的にされ、頻繁にいじめを受け続け、ある場合など、自殺に追い込まれることがあるが、これもこの図式に当てはまるのだろうか。また、母親か、父親が小さな子供を虐待し、育児や会社の仕事等でたまったストレスや鬱憤を晴らして、死に至らせることなども、この図式に当てはまるのであろうか。このように、いろいろな場面が頭に浮かんでくるが、作者 Jackson も「くじ引き」「生け贄」「石打の刑」という図式は、社会のいたるところに、存在しているように感じていたのかもしれない。そのために、彼女は「くじ引き」「生け贄」「石打の刑」という図式の「場所」をごく普通の、ありふれた農村に設定したのかもしれない。

「くじ引き」については、「くじ引き」と『旧約聖書』の中で見てきたように、『旧約聖書』に数多くの言及が見られることがわかったが、やはり、「生け贄」(ささげ物)についても、『旧約聖書』には数多くの言及が見られる。『新キリスト教辞典』や『新聖書辞典』を参考にしながらまとめてみると、『旧約聖書』には、大きく分けて、次の六つの「生け贄」(ささげ物)についての記述がある。それは、

1. **燔祭**(272回、全焼の生け贄、burnt offering)、神との正しい契約関係にあるイスラエルの民が、聖所の務めのため、毎日、規則的に、朝と夕、ささげるように命じられた標準的な唯一の生け贄で、動物を焼き尽くし、煙として、神のもとへ立ち上らせる生け贄である。このとき、一歳の子羊がささげられた。
2. **素祭**(32回、穀物のささげ物、grain offering)、主として、農作物のささげ

物から作られた物、小麦粉、種を入れないパン、せんべい、火にあぶった穀粒の穂がささげられた。

3. **酬恩祭**(87回、和解の生け贄、peace offering)、神と和解した者が、神に対する感謝と恩義、また、神との交わりを表すための生け贄であり、感謝の生け贄、誓願のささげ物、進んでささげるささげ物の三種類がある。ささげる物は牛、羊、ヤギである。
4. **罪祭**(123回、罪のための生け贄、sin offering)、過って律法違反の罪を犯した場合に、贖いのためにささげる生け贄で、ささげる物は、社会的身分が高い順によって、雄の牛、雄のヤギ、雌の羊かヤギ、鳩二羽、少量の小麦粉と定められていた。
5. **愆祭**(31回、罪過のための生け贄、trespass offering)、罪の行為によって隣人または神に損失を与えたときの生け贄であり、生け贄として、一頭の雄の子羊がささげられた。
6. **灌祭**(57回、注ぎのささげ物、または、注ぎのブドウ酒、drink offering)、いけにえをささげるとき、聖別のしるしとして祭壇に注いだブドウ酒等を指す。

(括弧内は言及回数、新改訳聖書の日本語訳、英語訳)

である。括弧内の言及回数を見れば、明らかなように、『旧約聖書』では、「くじ引き」以上に、「生け贄」(ささげ物)が重要な意味を持っていることがわかる。

The Lottery では、Mrs. Hutchinson が、穀物の豊作をもたらすために、「くじ引き」で選ばれて、「生け贄」にされたとすると、上に挙げた『旧約聖書』の六つの「生け贄」のうち、どの「生け贄」に当てはまるのだろうか。結論的に言えば、彼女の「生け贄」は上に挙げた、どの「生け贄」にも当てはまらない。というのは、上に掲げた「生け贄」の種類からもわかるように、『旧約聖書』では、神は人を「生け贄」にささげることを求めているからである。神にささげるものは動物が食物であり、人ではない。「くじ引き」のときもそうであったが、「生け贄」に関して、作者 Jackson は『旧約聖書』の「生け贄」の「原型」

を借りながらも、この短編小説では、その「原型」を『旧約聖書』とは異なった意味で使っている。

ただし、『旧約聖書』では、例外的に、人を神にささげる場面がある。「創世記」第二十二章第二節、日本語訳では、神は、アブラハムに向かって、

2. 神は言われた、「あなたの子、あなたの愛するひとり子イサクを連れてモリヤの地に行き、わたしが示す山で燔祭としてささげなさい」。

(下線は筆者)

英語訳では、

2. And He said, “ Take now your son, your only son, whom you love, Issac, and go to the land of Moriah; and offer him there as a burnt offering on one of the mountains of which I will tell you. ”

(下線は筆者)

と命令する。燔祭では、通常、一歳の子羊が「生け贄」としてささげられるが、ここでは、神は子羊の代わりに、彼の一人息子イサクをささげるように言っている。これは、アブラハムが、いかなる場合にも、神の命令に従うかどうかを確かめるために、命じたことである。それゆえ、第十節から十二節では、日本語訳では、

10. そしてアブラハムが手を差し伸べ、刃物を執ってその子を殺そうとした時、、、 12. み使いが言った、「わらべを手にかけてはならない。また何も彼にしてはならない。あなたの子、あなたのひとり子をさえ、わたしのために惜しまないので、あなたが神を恐れるものであることをわたしは今知った」。

(点線部分は省略部分)

英語訳では、

10. And Abraham stretched out his hand, and took the knife to slay his son....12. And he said, "Do not stretch out your hand against the lad, and do nothing to him, for now I know that you fear God, since you have not withheld your son, your only son, from Me."

(点線部分は省略部分)

とあるように、神はアブラハムが神を恐れる者であることを知って、彼が息子を殺すのをやめさせているので、人を神にささげるという行為は、結果的には、実現しないことになる。

そのため、*The Lottery* では、穀物の豊作のため、言い換えれば、天候のため、人が「生け贄」にされているが、これは、ユダヤ・キリスト教から見れば、明らかに、「異教徒の慣習」ということになる。この「異教徒の慣習」という言葉は、前に引用したように、短編小説 *The Lottery* の中では、使われていないが、Duffield が劇化した一幕劇 *The Lottery* の中では、短編小説 *The Lottery* には登場しない「登場人物」BELVA が

BELVA(contemptuously): The neighbors! If everybody wasn't so scared of their neighbors, maybe we'd give up some heathen customs that don't make sense any more. Half the young folks growin' up don't have the faintest notion what a Lottery stands for.

(下線は筆者)

という「台詞」の中で「異教徒の慣習」という言葉を使っている。BELVA は、毎年、「くじ引き」により、一人を選び出し、その人を「石打の刑」にして殺し、その人を天候祈願、豊作祈願の「生け贄」として差し出す、この儀式は、今では、意味のない「異教徒の慣習」であるとはっきりと言っている。そのため、

この儀式は、本来、ユダヤ教やキリスト教の儀式ではないと言っていることにもなる。しかし、それに対して、短編小説では、何故、作者 Jackson は、Duffield のように、この儀式が「異教徒の慣習」であるとはっきり言わなかったのだろうか。彼女がこのことに対して言明を避けているため、短編小説では、この儀式とユダヤ教やキリスト教との関係があいまいになっているだけではなく、この儀式とユダヤ教やキリスト教がどこかで繋がっているのではないかと感じさせる。このことについては、後に、さらに詳しく触れることにする。

「石打の刑」と『旧約聖書』

この作品の中で、Mrs. Hutchinson を「生け贄」として殺す手段として使われている「石打の刑」は、『聖書』においても、やはり、処刑の手段として使われている。

そもそも、『聖書』では、「石打の刑」で用いられる「石」そのものが重要な意味を持っている。古代イスラエルにおいて、「石」がいかに重要であったかは、『旧約聖書』、『新約聖書』を問わず、「石」に関する言及が計四百回近くにも及んでいることからわかる。日本には、森が多いため、日本人にとって、周囲に「木」が多く存在する。そして、「木」もその用途が幅広いだけに、日本人にとって、重要な意味を持ってきたように、おそらく、ユダヤ人にとっても、周囲に「石」が豊富にあり、その用途が広いだけに、重要な意味を持ってきたのだろう。

ここで、まず、『聖書』から「石」に関する言及がある部分を二つだけ引用してみることにする。『旧約聖書』「創世記」第二十八章第二十二節には、日本語訳で、

22 . またわたしが柱に立てたこの石を神の家といたしましょう。そしてあなたがくださるすべての物の十分の一を、わたしは必ずあなたにささげます。

(下線は筆者)

英語訳では、

22. And this stone, which I have set up as a pillar, “will be God's house; and of all that Thou dost give me I will surely give a tenth to Thee.”

(下線は筆者)

また、『新約聖書』「ルカによる福音書」第二十章第十七節には、日本語訳で、

17. そこで、イエスは彼らを見つめて言われた、「それでは、
『家造りらの捨てた石が
隅のかしら石になった』
と書いてあるのは、どういうことか。

(下線は筆者)

英語訳では、

17. But He looked at them and said, “ What then is this that is written,
“THE STONE WHICH THE BUILDERS REJECTED,
THIS BECAME THE CHIEF CORNER STONE”?

(下線は筆者)

というように、イエスは『旧約聖書』「詩篇」第百十八篇第二十二節から引用しながら語っている。上の引用文はほんの一例であるが、『旧約聖書』においても、『新約聖書』においても、「石」が、彼らの日常生活において、重要であるだけでなく、彼らの信仰生活においても、重要な意味を持っている。そのため、彼らは、信仰生活を語る場合、しばしば、「石」を例えとして用いてきた。

古代イスラエルでは、周囲に「石」が豊富にあることが、彼らの信仰生活を語る時、大きな意味を持ってきたが、その一方では、その「石」は「石打の

刑」という独自の処刑の方法も生み出した。「石打の刑」に関する言及だけに限って言えば、『聖書』では、百回近くにもなるだろう。『新聖書辞典』によれば、「石打の刑」に処せられる者は

1. モレク(偶像の総称)に子供を生け贄としてささげる者
2. 霊媒や口寄せ
3. 神を冒瀆する者
4. 安息日に違反する者
5. 他の人々を偶像礼拝に誘う者
6. 他の神々や天体を拝む者
7. 父母に対して不従順な者
8. 姦淫する者
9. 聖絶違反者(神のために聖別されたもので、一般の用途には使えないもの)
10. 人を殺した牛

等である。この刑の執行は、通常、宿営の外で行われた。

「石打の刑」と『聖書』の「登場人物」との結びつきはかなり深いと思われる。モーセ、ダビデ、イエス、パウロも、もう少しのところ、この刑に処せられるところまでいっている。そして、ステパノは、じっさいに、この刑で殺されている。

モーセは、『旧約聖書』「出エジプト記」の第十七章第四節の中で、日本語訳では、

4. このときモーセは主に叫んで言った、「わたしはこの民をどうすればよいのでしょうか。彼らは、今にも、私を石で打ち殺そうとしています」。

(下線は筆者)

英語訳では、

4. So Moses cried out to the Lord, saying “ What shall I do to this people? A little more and they will stone me. ”

(下線は筆者)

と言っている。

ダビデについては、『旧約聖書』「サムエル記上」の第三十章第六節には、

6 . その時、ダビデは非常に悩んだ。それは民がみなおのおのそのむすこ娘のために心を痛めたため、ダビデを石で撃とうと言ったからである。しかしダビデはその神、主によって自分を力づけた。

(下線は筆者)

6. Moreover David was greatly distressed because the people spoke of stoning him, for all the people were embittered, each one because of his sons and his daughters. But David strengthened himself in the Lord his God.

(下線は筆者)

と書かれている。

イエスについては、『新約聖書』「ヨハネによる福音書」第十章第三十一節では、

31 . そこでユダヤ人たちは、イエスを打ち殺そうとして、また石を取り上げた。

31. The Jew took up stones again to stone Him.

と書かれている。

パウロにいたっては、『新約聖書』「使徒行伝」第十四章第十九節に、

19. ところが、あるユダヤ人たちはアンテオケやイコニウムから押しかけてきて、群衆を仲間に引き入れたうえ、パウロを石で打ち、死んでしまったと
思って、彼を町の外に引きずり出した。

(下線は筆者)

19. But Jews came from Antioch and Iconium, and having won over the multitudes, they stoned Paul and dragged him out of the city, supposing him to be dead.

(下線は筆者)

と書かれているように、じっさいに、「石」で打たれ、もう少しのところで、命を失うところだった。

ステパノについては、『新約聖書』「使徒行伝」第七章第五十七節から第六十節に、

57. 人々は大声で叫びながら、耳をおおい、ステパノ目がけて、いっせいに殺到し、58. 彼を市外に引き出して、石で打った。...、59. こうして、彼らがステパノに石を投げつけている間、ステパノは祈りつづけて言った、...、60 ...、彼は眠りについた。

(下線は筆者、点線部分は省略部分)

57. But they cried out with a loud voice, and covered their ears, and they rushed upon him with one impulse. 58. And when they had driven him out of the city, they began stoning him.... 59. And falling on his knees, he cried out a loud voice,... 60 ... He fell asleep.

(下線は筆者、点線部分は省略部分)

と書かれていて、彼は「石打の刑」によって、じっさい、処刑されている。このように、モーセ、ダビデ、イエス、パウロがこの刑に処せられる寸前にまでいき、じっさい、ステパノが処刑されたのは、彼らが「石打の刑」に値する、上に挙げた十ばかりの例のいずれかに当てはまると、群集が判断したからである。

しかし、Mrs. Hutchinson の場合は、それらのいずれの例にも当てはまらない。Mrs. Hutchinson は「くじ引き」の結果、「石打の刑」に処せられるが、彼女の罪は上の一覧表に書かれている、いずれの罪にも当てはまらない。ということは、彼女が「石打の刑」に処せられたのは、その刑に値する罪を犯したためではないことがわかる。彼女は、罪とはなんら関係なく、「くじ引き」によって選ばれて、「石打の刑」に処せられている。そのため、彼女は、『聖書』に書かれている理由によって、処刑されたのではない。ここでも、作者 Jackson は『聖書』から「石打の刑」という処刑方法を借りて、短編小説 *The Lottery* の中で用いているが、『聖書』の「石打の刑」とは異なった意味で、「石打の刑」を使っていることがわかる。

結び

作者 Jackson は、『聖書』、特に、『旧約聖書』から、「くじ引き」、「生け贄」、そして、「石打の刑」を、いわば、「原型」として借りて、短編小説 *The Lottery* を書いたことは明らかであろう。しかし、彼女は、それらを『旧約聖書』から借りたにもかかわらず、『旧約聖書』における「くじ引き」、「生け贄」、「石打の刑」とは異なった使い方をしている。

『旧約聖書』では、「くじ」は、神の恩寵の表れであり、また、罪を犯した者を選び出すための方法でもあった。「くじ引き」と『旧約聖書』の中で見てきたように、短編小説では、Mrs. Hutchinson は「くじ引き」で選ばれることになるが、彼女にとって、「くじ引き」はこの二つのうちのいずれにも当てはまらない。「くじ引き」の結果、彼女は選ばれて、殺されるのであるから、それが神の

恩寵の表れであるはずがない。また、『旧約聖書』では、罪を犯した者を選び出すために「くじ」が使われているが、彼女は何ら罪を犯していないにもかかわらず、「くじ引き」で選ばれている。これも、彼女から見れば、理不尽なことである。「生け贄(ささげもの)」についても、「生け贄」と『旧約聖書』の中でも見てきたように、『旧約聖書』では、穀物や動物は「生け贄(ささげもの)」としてささげられるが、人が「生け贄」としてささげられることはない。しかし、この短編小説では、Mrs. Hutchinson は、天候祈願、豊作祈願のために、「生け贄(ささげもの)」にさせられている。また、「石打の刑」と『旧約聖書』の中でも見てきたように、『旧約聖書』の「石打の刑」に値する条項の、どれ一つにも抵触しないにもかかわらず、Mrs. Hutchinson は「石打の刑」に処せられている。

Jackson は、何故、『旧約聖書』の「くじ引き」、「生け贄」、「石打の刑」をそのままの意味で使わなかったのだろうか。何故、彼女はそれらの本来の意味ではなく、意味を少しずらした形で用いているのだろうか。それは、単に、『旧約聖書』から「原型」を借りているだけなのだろうか。短編小説を書くに当たって、『旧約聖書』の中に、たまたま、都合のよい「原型」が見つかったので(もちろん、『聖書』は文学的「原型」の宝庫であるが)、それを短編小説のテクニクとして用いるためにだけ、そうしたのでだろうか。それとも、「くじ引き」、「生け贄」、「石打の刑」のように、本来、ユダヤ・キリスト教の聖典である『旧約聖書』の中で用いられるものでも、人間は、『聖書』の持つ権威を借りながらも、時代とともに、その性格を変えて、自分たちの社会や個人にとって、都合のよい方へ変えてしまうということを伝えようとしているのだろうか。いくら『聖書』の中に書かれていることでも、自分たちに都合が悪くなれば、故意にその意味を変えて、自分たちを正当化している人々を描こうとしているのだろうか。つまり、『聖書』の教えに従うのではなく、『聖書』を用いて、自分たちを正当化する、すなわち、『聖書』を正当化のための道具として、用いている人間を描くために、作者 Jackson は『旧約聖書』から「原型」を借りたのだろうか。

彼女が『旧約聖書』から「くじ引き」、「生け贄」、「石打の刑」という「原型」

を借りているにもかかわらず、この短編小説には、教会に関する言及はひとつもない。アメリカでは、このような長い歴史を持つ地方の村には、必ずと言っていいほど、教会がある。それにもかかわらず、この作品には、教会に関する言及がひとつもない。この作品では、

The people of the village began to gather in the square, between the post office and the bank, around ten o'clock;...(p636-p637)

(下線は筆者、点線部分は省略部分)

と書かれているように、この村の中で言及されている建物は広場を挟んでいる郵便局と銀行だけである。教会を含めて、その他の建物に関する言及はない。彼女が、『旧約聖書』から「原型」を借りているにもかかわらず、作品の中では、教会について言及していないのは、たまたま、そうしたのではなく、意図的に、そうしたのではないだろうか。というのは、彼女は、直接的に、教会員が『聖書』の教えを、その権威を利用して、自己正当化に用いていることを描くのではなく、『旧約聖書』から「くじ引き」、「生け贄」、「石打の刑」という「原型」を借りて、その意味を少しずつすることによって、それらを自分たちに都合のいい方へ変えている様を描こうとしたのではないだろうか。そうすれば、間接的に、暗示的に、教会員である村人が神や『聖書』を冒瀆しているのを描くことができる。そのため、彼らは『聖書』の中に書かれている「くじ引き」、「生け贄」、「石打の刑」を行いながらも、『聖書』の中に書かれている意味ではなく、自分たちの生存にとって都合のいい天候をもたらすため、すなわち、天候祈願をするために、何の落ち度もない Mrs. Hutchinson を「くじ引き」で選び出し、彼女を「生け贄」として、「石打の刑」で処刑したのではないだろうか。

おわり

この論文のテキストは、短編小説 *The Lottery* には、

The Norton Anthology of Short Fiction Edited by R. V. Cassill W. W. Norton & Company 1978 *The Lottery*(p636-644)

を使用し、一幕劇 *The Lottery* には、

15 *American One-Act Plays* Edited and with Introductions by Paul Kozelka Pocket Books 1961 New York

を使用した。そのため、短編小説 *The Lottery*、一幕劇 *The Lottery* はともに、テキストからの引用文の後につけられたページ数は上記のそれぞれのテキストのページ数である。なお、一幕劇 *The Lottery* の初版は *The Lottery, a Play in One Act* Dramatic Publishing Company Chicago 1953 である。

『聖書』からの引用文は、日本語訳はすべて、

『聖書』口語訳 日本聖書協会 1984

による。その際、『聖書』新改訳も参考にした。英語訳はすべて、

The New American Standard Bible Holman Bible Publishers Nashville 1977

を用いた。

注

1. *A Biographical Dictionary of Film* third edition by David Thompson Alfred A. Knopf, INC. New York 1995

The Oxford Companion to Film Edited by Liz-Anne Bawden Oxford University Press
1976

参考文献

- 1 . <http://www.imbd.com/title/tt0038712/fullcredits> Brainerd Duffield の点描を書くに当たって、参考にした。
- 2 . 『新聖書辞典』 いのちのことば社出版部 1996 年
- 3 . 『新キリスト教辞典』 いのちのことば社出版部 1991 年
- 4 . 『新実用聖書注解』 いのちのことば社出版部 1996 年
- 5 . *Dictionary of the Bible* by John L. Makenzie, S. J. Mcmillan Publishing CO., INC. New York 1965
- 6 . *Who's Who in the New Testament* by Ronald Brownrigg J M Dent London 1993
- 7 . *Who's Who in the Old Testament* by Joan Comay Routledge London 1995
- 8 . 『魔女とキリスト教』 ヨーロッパ学再考 上山安敏著 講談社学術文庫 1998 年